鴻臚館跡 12

—平成11・12年度発掘調査報告書—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第733集

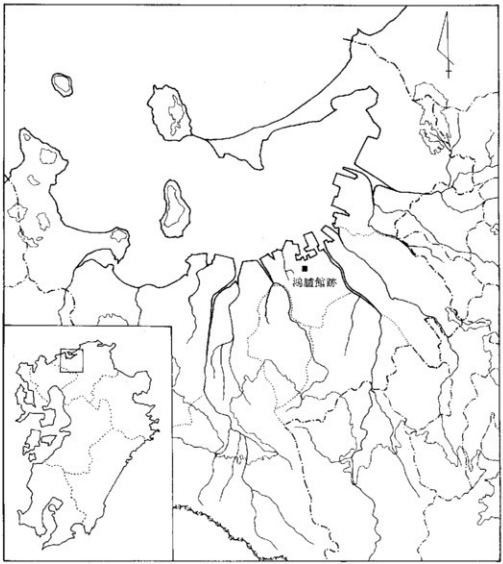
2002

福岡市教育委員会

鴻臚館跡12

平成11・12年度発掘調査報告書

福岡市埋蔵文化財調査報告書第７３３集

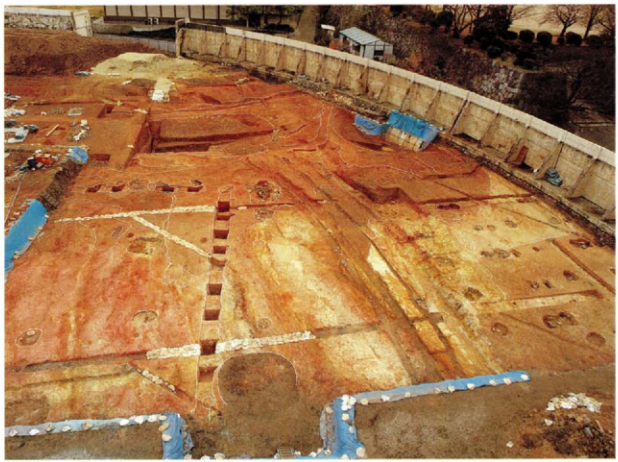


９９１０〈ＦＵＥ－４３〉
０００８〈ＦＵＥ－４４〉

２００２

福岡市教育委員会

1．平成11・12年度調査区全景　航空写真（モザイク）



2．平成11年度調査区西半と12年度調査区全景（北から）

3．平成11年度調査区西半と12年度調査区全景（南から）

4．平成13年度調査区第Ⅲ期礎石建物（東から）

5．平成13年度調査区第Ⅱ期建物　東門と布掘掘立柱列（北から）

序

鴻臚館跡の発掘調査は、昭和62年末、福岡市中央区の国史跡福岡城跡内にある平和台野球場外野席スタンド改修工事の際の発見を契機として、翌63年から本格的に開始いたしました。

本市では、鴻臚館跡の全容解明を目的として、昭和63年度に鴻臚館跡調査研究指導委員会を設置し、その御指導の下で、発掘調査と関連資料の収集等を継続して推進しております。

これまでの調査で、鴻臚館の遺構が広がると予想されておりました平和台野球場は平成10年度に解体撤去工事が行われ、平成11年度からいよいよ平和台野球場跡地の本格的な発掘調査に着手いたしました。

平成11年度の調査では、これまで見つかっていた鴻臚館建物の北側にも、谷を埋め立てた堀状の遺構や、多量の瓦や陶磁器を検出するなどの新しい発見があり、平成12年度の調査では奈良時代の建物区画が見つかり、堀北側にさらに別区画の建物が存在していたことが明らかになりました。

鴻臚館の全容解明に向けて、今後の調査が大いに期待されるところであります。

本書は、平成11・12年度に実施した、平和台野球場跡地の発掘調査成果を内容とする報告書です。本報告書が、鴻臚館跡をはじめ本市の埋蔵文化財に対するご理解とご認識の一助となれば幸いであります。

発掘調査から本報告書の刊行にいたるまで、ご理解とご協力をいただいた財務省福岡財務支局、福岡市都市整備局、また、温かくご指導いただいた鴻臚館跡調査研究指導委員会の各先生方、文化庁、福岡県教育庁の皆様方には深甚なる謝意を表します。

平成14年3月31日

福岡市教育委員会
教育長 生出征生

例　言

1．本書は、平成11・12年度に実施した鴻臚館跡発掘調査報告書である。
　平成11年度調査区は、平成12年度も一部継続して調査を実施しており、また前回報告書「鴻臚館跡11」で取り上げられなかった平成11年度調査の遺物についても、本報告書に掲載している。
2．本書で用いた地図は、Fig.1が国土地理院発行五万分の一地形図「福岡」、Fig.2に福岡市都市計画図№60.61.71.72である。
3．本書で用いた方位は、平面直角座標系第Ⅱ座標系に拠っており、真北方位より0°19′西偏する。
4．調査区はこの座標の基づき、10mのグリッドに区画した。便宜上、X軸64,790を始点に北側10m毎にａ，ｂ，ｃ…、Y軸は西側10m毎に-56,790台を790、-56,800台を800と順に呼称した。
5．遺構番号は4桁とし、平成11・12年度調査区をしめす10・11の後に通し番号をつけ、遺構性格を示すアルファベットを前に付した。
　例　堀・柵列：ＳＡ１０○○　　建物：ＳＢ　　溝状遺構・堀：ＳＤ　　道・通路：ＳＦ
　池：ＳＧ　　土壙：ＳＫ　　埋立遺構：ＳＭ　　性格不明の遺構・その他：ＳＸ
6．本書の執筆は池崎譲二が担当した。編集は鴻臚館跡調査担当課長折尾学の協力を得て、池崎が行った。
7．編集に当たっては、整理調査員　宮園登美枝、整理作業員　堀一恵、金石邦子、冨永静子　大里律子の補助を受けた。
8．遺物実測は、ゴチョウ・メネス（九州大学）、丹羽崇史（九州大学）、宮園、池崎がおこなった。トレースは宮園がおこなった。
9．ＳＧ１０４６出土瓦の分類計測は、陳　洪（九州大学）を中心に実施した。
10．平成12年度の調査は以下の方々の参加で実施した。記して感謝の意を表します。

［発掘作業］

家村冨基郎、伊藤美知子、牛尾成正、大橋善平、嘉藤栄志、鐘ヶ江正良、清原ユリ子、齋藤善弘
坂本ハツ子、佐藤テル子、芝　三郎、島津明男、杉村文子、高田甚一郎、谷　吉美、堤　篤史
土斐崎初栄、永井鈴子、中尾　亨、仲野正徳、能美須賀子、原　幸子、脇坂レイコ
中村渉（専修大学）、陳洪（九州大学）、西岡千絵（福岡大学）尹善瑛（漢陽大学）
小寺智津子（東京大学）

［整理作業］

整理調査員　宮園登美枝、黄建秋（九州大学、現南京大学）、ゴチョウ・メネス（九州大学）
整理作業員　金石邦子、寺村チカ子、冨永静子、堀一恵、大里律了、山口玲子

本文目次

第１章　序　説……1

１、調査計画……1

２、既往の調査……3

３、平成12年度の調査事業概要……5
（１）発掘調査の組織……5
（２）調査事業の概要……5

第２章　平成11・12年度発掘調査報告……7

１、発掘調査の経過……7

２、平成11年度調査区の遺構と遺物……9

３、時期別検出遺構と出土遺物……26
（１）戦後構築物……26
（２）旧陸軍24連隊関係遺構……26
（３）福岡城関係遺構……28
（４）鴻臚館廃絶後から福岡城築城間遺構……31
（５）鴻臚館・筑紫館関係遺構……31

３、平成11・12年度調査のまとめ……40

４、平成13年度調査速報……41

付編１　福岡城跡・鴻臚館跡関係調査報告書　一覧……42
付編２　大宰府鴻臚館関係主要文献一覧……42

挿図目次

Fig. 1　鴻臚館跡の位置と周辺遺跡分布図（1／50,000）…… 2
Fig. 2　福岡城内既往発掘調査区位置図（1／5,000）…… 4
Fig. 3　鴻臚館跡調査研究指導委員会現地視察…… 6
Fig. 4　埋蔵文化財センターによる瓦敷き遺構型取り…… 6
Fig. 5　現地説明会風景…… 6
Fig. 6　平成12年度調査区調査前風景…… 7
Fig. 7　平成12年度調査区表土剥ぎ風景…… 7
Fig. 8　ラジコンヘリコプターによる写真撮影…… 7
Fig. 9　ＳＧ１０４６出土遺物（１）…… 9
Fig.10　ＳＧ１０４６出土遺物（２）…… 10
Fig.11　ＳＧ１０４６グリッド区分…… 11
Fig.12　瓦叩き目文様分類基準…… 12
Fig.13　１）ＳＤ１０４５南北土層断面図　東壁…… 14
　　２）ＳＤ１０４５東西土層断面図　南壁…… 14
　　３）ＳＤ１０４５南北土層断面図　西壁…… 14
Fig.14　ＳＤ１０４５ブロックサンプリング　３層、４Ａ層、４Ｂ層出土遺物…… 15
Fig.15　ＳＤ１０４５ブロックサンプリング　５層、５Ｂ層、５Ｄ層出土遺物…… 16
Fig.16　ＳＤ１０４５　２層、３層、３層シルト層出土遺物…… 17
Fig.17　ＳＤ１０４５　４層出土遺物…… 18
Fig.18　ＳＤ１０４５　４層下部出土遺物…… 19
Fig.19　ＳＤ１０４５　５層出土遺物…… 20
Fig.20　ＳＤ１０４５　５層下部出土遺物、採集遺物…… 21
Fig.21　ＳＤ１０４５　出土遺物瓦類…… 22
Fig.22　１）ＳＧ１０５４、ＳＤ１０４５平面図…… 23
　　２）ＳＧ１０５４　土層断面図…… 23
Fig.23　ＳＧ１０５４　瓦堆積中出土遺物…… 24
Fig.24　ＳＧ１０５４土層確認トレンチ出土遺物…… 25
Fig.25　平成11・12年度　近世、近現代遺構平面図（1／400）……折り込み
Fig.26　平成11・12年度　古代、中世遺構平面図（1／400）……折り込み
Fig.27　平成12年度　近世、近現代遺構平面図（1／200）…… 27
Fig.28　ＳＸ１１１９土層断面図…… 28
Fig.29　ＳＥ１１０２実測図、出土遺物…… 29
Fig.30　ＳＢ１０１９、ＳＢ１１０１、ＳＦ１０６１出土遺物…… 29
Fig.31　平成12年度　古代、中世遺構平面図（1／200）…… 30
Fig.32　１）平成12年度調査区グランド部分東西土層断面図北壁…… 31
　　２）平成12年度調査区グランド・スタンド間部分南北土層断面図西壁…… 31
Fig.33　ＳＡ１１０４実測図、出土遺物…… 32

Fig.34　ＳＫ１１０３実測図、出土遺物……34
Fig.35　昭和62年度調査　ＳＤ０８（ＳＧ１１１５）平面図、上層断面図（1／100）……35
Fig.36　ＳＤ１１１４、ＳＧ１１１５出土遺物……36
Fig.37　ＳＤ１１１６出土遺物……37
Fig.38　ＳＳＦ１１１７、ＳＫ１１２４、ＳＫ１１２５、ＳＫ１１２７出土遺物……38
Fig.39　鴻臚館跡検出建物遺構平面概念図……41

写真図版目次

巻頭図版１　平成11・12年度調査区全景　航空写真（モザイク）
２　平成11年度調査区西半と12年度調査区全景（北から）
３　平成11年度調査区西半と12年度調査区全景（南から）
４　平成13年度調査区第Ⅲ期礎石建物（東から）
５　平成13年度調査区第Ⅱ期建物　東門と布掘掘立柱列（北から）

Pl.１　平成11年度調査区遠景（西から）　２．ＳＧ１０４６全景（東から）
３．ＳＧ１０４６南斜面瓦出土状況（北西から）
４．ＳＧ１０４６北斜面瓦出土状況（南西から）
Pl.２　ＳＤ１０４５　１．土層断面東壁（北西から）　２．上層断面西壁・南壁（東から）
３．上層断面南壁（北から）　４．５Ｄ層遺物出土状況（北東から）
Pl.３　ＳＤ１０４５１．鬼瓦出土状況遠景（東から）　２．鬼瓦出土状況近景
Pl.４　ＳＧ１０５４１．瓦出土状況（西から）　２．土層断面（北西から）
Pl.５　１．平成11年度調査区と平成12年度調査区上部検出遺構（南から）
２．平成11年度調査区と平成12年度調査区下部検出遺構（南から）
Pl.６　１．平成11年度調査区と平成12年度調査区上部検出遺構（北から）
２．平成11年度調査区と平成12年度調査区下部検出遺構（北から）
Pl.７　１．ライトスタンド上部遺構（西から）　２．ライトスタンド下部遺構（南西から）
Pl.８　１．ＳＸ１１１９上層断面（西から）　２．ＳＸ１１１９土層断面（東から）
Pl.９　ＳＥ１１０２　１．上面検出状況（西から）　２．土層断面（西から）
３．下面井筒検出状況（南西から）４．完掘状況（南西から）５．井筒遺存状況（西から）
Pl.10　ＳＡ１１０４　１．西列検出状況（北から）　２．西列検出状況（南から）
３．南列と西南隅部分検出状況（西から）
Pl.11　ＳＡ１１０４　１．柱抜き跡調査後全景（北から）　２.全景、人の位置が柱位置（北から）
Pl.12　ＳＡ１１０４　１．柱抜き跡調査後全景（東から）　２.全景、人の位置が柱位置（東から）
Pl.13　ＳＡ１１０４西列柱抜き穴断面　１．P.１（北から）０　２．P.２（北から）
３．P.６（北から）　４．P.７（北から）　５．P.８（北から）　６．P.10（北から）
Pl.14　ＳＡ１１０４南列柱抜き穴断面　１．P.１（東から）　２．P.２（東から）
３．P.４（東から）　４．P.５（東から）
Pl.15　１．ＳＧ１１１５（東から）　２．ＳＦ１１１７（西から）

Pl.16　ＳＤ１１１６　１．遺物出土状況（南から）　２．遺構確認状況（東から）
３．遺構確認状況（南から）　４．遺構完掘状況（南から）
Pl.17　ＳＤ１１１６遺物出土状況　１．斜面上部出土状況（東から）　２．斜面下部出土状況（東から）
Pl.18　１．ＳＫ１１０３（北から）　２．ＳＫ１１２１（西から）　３．ＳＤ１１２２（南から）
４．ＳＫ１１２４、１１２５　５．ＳＫ１１２４遺物出土状況（東から）
Pl.19　出土遺物（１）
Pl.20　出土遺物（２）
Pl.21　出土遺物（３）
Pl.22　出土遺物（４）

表目次

Tab. 1　鴻臚館跡調査中期計画表……1
Tab. 2　福岡城跡・鴻臚館関係調査一覧……3
Tab. 3　平成１１年度調査検出遺構一覧……8
Tab. 4　ＳＧ１０４６　ｅ区・ｆ区　瓦集計表……11
Tab. 5　ＳＧ１０４６　ｅ区・ｆ区　４Ａ瓦出土割合グラフ……11
Tab. 6　平成１１年度調査検出遺構一覧……26
Tab. 7　付編１　福岡城跡・鴻臚館跡関係調査報告書一覧……42
Tab. 8　付編２　大宰府鴻臚館関係主要文献一覧……42

第1章　序　説

1．調査計画

鴻臚館跡の発掘調査は、昭和62年末の平和台野球場外野席における関連遺構と遺物の発見を契機とする。昭和63年度には鴻臚館跡調査研究指導委員会が組織され、全容解明のための本格的な発掘調査が開始された。発掘調査は下表の「鴻臚館跡調査中期計画」の下で実施している。

中期計画は、鴻臚館跡推定地が国史跡福岡城跡内に立地しているために、文化庁をはじめとする関係各機関と協議の上、「舞鶴城址将来構想」の下で進められている城内各施設の移転事業計画を参考にしながら策定し、平成5年度第2回指導委員会で了承を受けた。

第Ⅰ期調査は平和台野球場外周南側部分を対象に、昭和63年度～平成4年度にかけて調査を実施。この地区では、奈良時代から平安時代までの建物遺構群と中国産陶磁器をはじめとする大量の遺物が出土し、鴻臚館跡の可能性が高いことが確認された。またこの地区は、5年度から7年度にかけて、平和台野球場撤去後の本格的整備までの当面の仮整備という位置づけで第Ⅰ期整備を実施した。

第Ⅱ期調査は、5年度と6年度に福岡城三の丸西郭にある「舞鶴公園西広場」を調査対象地として、福岡城跡西辺部における鴻臚館関連遺構と遺物の有無確認、および旧地形復元を目的に調査を実施した。その結果、福岡城西北域における築城当時の地業の状況と当時の海岸線の復元が可能となった。

第Ⅲ期調査は、第Ⅱ期調査区南側の福岡城土塁部分を対象に平成7～9年度に実施し、平成10年度には平和台野球場解体工事に伴う立会調査と解体後の試掘調査を実施した。平和台野球場跡地部分の本格的発掘調査は、面積が広大なため南半部と北半部に分けて実施することした。南半部を第Ⅳ期調査として、当初平成11年度～14年度を予定していたが、平成11年度調査で遺構の遺存状況が予想以上に良好なことが明らかになり、16年度まで調査を延長することが平成12年度指導委員会で了承された。北半部は第Ⅴ期調査として第Ⅳ期調査終了後実施する。またこの間の調査結果を随時とりまとめつつ、整備に向けての基本構想等の検討を行う計画である。

第Ⅵ期調査は、鴻臚館跡の全容解明にとって必要と思われる地点について調査を行うもので、第Ⅳ期調査以降の成果およびその進捗状況をみながら、調査地点等は検討して行く予定である。

Tab. 1　鴻臚館跡調査中期計画表（平成14年3月31日現在）

※網かけ部分は本報告の対象とする事業年度

		対象地区	昭62～平4	平5～6年	7年	8年	9年	10年	11～16年	17～21年	22～26年	備　考
	緊急調査	平和台野球場外野席										鴻臚館の発見
発掘調査	第Ⅰ期調査	旧テニスコート										指導委員会の設置 本格的調査の開始 第Ⅰ期整備対象地
	第Ⅱ期調査	西広場										範囲確認調査 旧地形の復元
	第Ⅲ期調査	野球場外周南側土塁他 野球場跡地										範囲確認調査 野球場解体立会調査 野球場跡地試掘調査
	第Ⅳ期調査	野球場南区										平成11年から調査着手 （6カ年計画）予定
	第Ⅴ期調査	野球場北区										平成17年から調査着手 （5カ年計画）予定
	第Ⅵ期調査	舞鶴球技場等重要地点										
整備	第Ⅰ期整備	旧テニスコート										平成7年8月10日完成
	第Ⅱ期整備	野球場跡地										第Ⅳ期調査の結果を検討のうえ計画

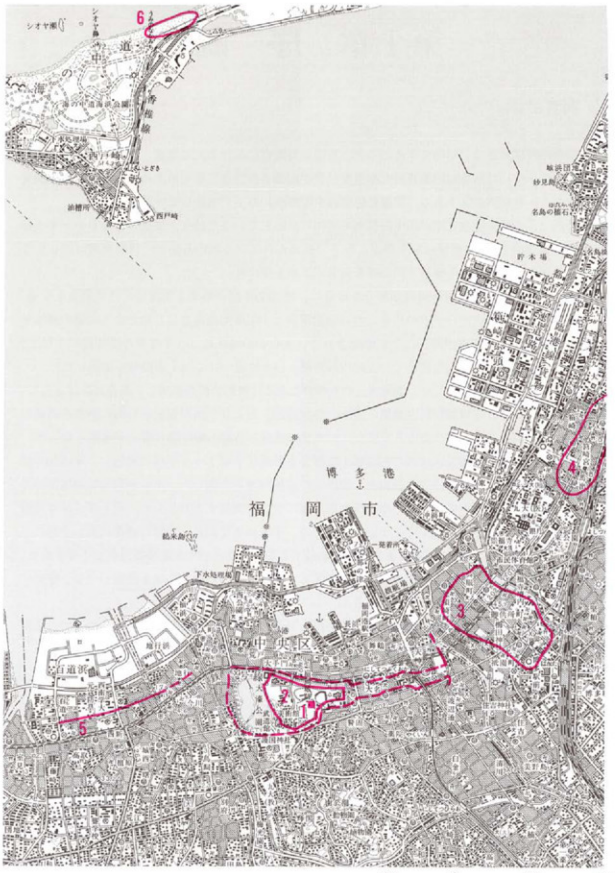


Fig. 1 鴻臚館跡と周辺遺跡分布図（1/50000）

1．鴻臚館跡
2．福岡城跡（国指定史跡）
3．博多遺跡群
4．福崎遺跡群
5．元寇防塁跡（国指定史跡）
6．海の中道遺跡

2．既往の調査

福岡城跡の調査は、史跡指定範囲の内外において、平成13年度末までに48地点について調査が実施されている。そのうち鴻臚館跡発掘調査事業として実施されたのは19次21地点である。Tab. 2にその内訳を示した。文献番号は次頁の参考文献一覧に対応する。なお、平成12年度の調査は福岡城跡関係第44次調査にあたり、鴻臚館跡関連調査では18次調査となる。

Tab. 2　福岡城跡・鴻臚館関係調査一覧（平成11年度現在）

調査番号	次数	地　区	史跡内外区分	調査原因	調査面積	調査期間	調査担当者	文　献	備　考
	A	三の丸中央部	史跡内	テニスコート建設		510800～3日間	九州文化総合研究所		鴻臚館1次
	B		史跡内	国病院建設		590626～590702	文部省·文化財保護委員会		
6301	1	三の丸東郭	史跡内	裁判所建設	596	631007～631105	福岡県教育委員会	1	鴻臚館2次
						640327～640331			
7605	2	内堀内壁	史跡外	地下鉄建設	14.900	761201～771008	折尾学・池崎譲二 浜石哲也.山崎龍雄	3	
7728	3	薬院新川	史跡外	地下鉄建設	500	780301～780630	折尾学・池崎譲二	3	
7948	4	御鷹屋敷跡	史跡内	史跡整備	2.200	790719～790811	飛高憲雄.力武卓治	2・4	
8134	5	赤坂門北側内堀	史跡外	ビル建設	70	820317～820326	田中壽夫	3	
8343	6	祈念櫓跡	史跡内	史跡整備	36	840201～840612	井沢洋一		
8449	7	肥前堀東端部	史跡外	県公園建設	580	840601～840612	福岡県教育委員会		
8533	8	肥前堀東部	史跡外	市庁舎建設	150	850700～850800	折尾学.山崎純男	5	
8747	9	三の丸中央部	史跡内	野球場改修	650	871225～880120	山崎純男・吉武学	7・10	鴻臚館3次
8829	10	三の丸中央部	史跡内	確認調査	856	880727～881210	山崎純男・吉武学	7・18	鴻臚館4次
8865	11	西～南縁土塁	史跡内	公園整備	500	880727～881210	山崎純男・吉武学	6	
8840	12	肥前堀東部	史跡外	ビル建設	650	881107～881126	柳沢一男	8	
8910	13	三の丸中央部	史跡内	確認調査	1.200	890420～891207	山崎純男.吉武学	7・18	鴻臚館5次
8950	14	肥前堀東部	史跡外	市庁舎建設	700	891011～891021	菅波正人	9	
9005	15	三の丸中央部	史跡内	確認調査	1.300	900409～910131	山崎純男・吉武学	7・18	鴻臚館6次
9065	16	月見櫓跡	史跡内	確認調査	190	910301～910331	山崎純男・吉武学	11	
9130	17	三の丸中央部	史跡内	確認調査	1.000	910501～920331	山崎純男・瀧本正志	12・18	鴻臚館7次
9146	18	時櫓跡	史跡内	確認調査	250	920301～920331	瀧本正志		
9218	19	三の丸中央部	史跡内	確認調査	1.670	920615～921030	山崎純男・瀧本正志	13	鴻臚館8次
9236	20	三の丸中央部	史跡内	確認調査	430	920910～930331	山崎純男・瀧本正志	13・18	鴻臚館9次
9262	21	花見櫓跡	史跡内	確認調査	200	930301～930331	瀧本正志		
9326	22	三の丸西部郭	史跡内	確認調査	450	930816～940228	田中壽夫・瀧本正志	15	鴻臚館10次
9345	23	追廻門南側	堀史跡	外公園整備	220.3	931213～940228	井沢洋一	14	
9353	24	本丸西縁部	史跡内	公園整備	80	931211～931221	田中壽夫・瀧本正志		
9363	25	潮見櫓跡石垣	史跡内	史跡整備	65	940301～940328	田中壽夫・瀧本正志		
9412	26	赤坂門石垣	史跡外	変電所建設	430	940525～940806	吉武　学		
9420	27	三の丸中央部	史跡内	史跡整備	50	940606～940731	田中壽夫・瀧本正志	17	鴻臚館11次
9432	28	三の丸西部郭	史跡内	確認調査	850	940801～950320	田中壽夫・瀧本正志	17	鴻臚館11次
9451	29	三の丸東部郭	史跡内	施設建替	1024	941101～950130	力武卓治	21	
9463	30	三の丸南側土塁	史跡内	確認調査	60	950201～950217	田中壽夫・瀧本正志	17	鴻臚館11次
9537	31	三の丸中央部	史跡内	確認調査	300	951101～960329	田中壽夫	20	鴻臚館12次
9546	32	中堀	史跡外	共同住宅建設	154	951211～960329	瀧本正志	19	
9561	33	三の丸西北郭土塁	史跡内	公園整備	500	960301～960329	力武卓治		
9617	34	三の丸西南郭土塁	史跡内	駐車場整備	32	960621～960702	田中壽夫		
9620	35	三ノ丸中央郭	史跡内	確認調査	450	960704～961204	田中壽夫	20	鴻臚館13次
9630	36	肥前堀	史跡外	共同住宅建設	46	960823～960823	池田佑次		
9639	37	赤坂門外壁	史跡外	事務所建設	10	960912～960912	池田佑次		
9671	38	潮見櫓跡基壇	史跡内	史跡整備	300	970220～970318	田中壽夫		
9736	39	三ノ丸中央郭	史跡内	確認調査	204	970818～980131	田中壽夫	22	鴻臚館14次
9751	40	追廻門南側内堀内壁	史跡内	確認調査	135	971027～971107	田中壽夫		
9807	41	平和台球場解体	史跡内	公園整備	230	980410～980416	田中壽夫・池崎譲二	23	鴻臚館15次
9831	42	平和台球場跡地	史跡内	試掘調査	930	980922～990120	塩屋勝利・池崎譲二	23	鴻臚館16次
9910	**43**	**平和台球場跡地**	**史跡内**	**確認調査**	**3,500**	**990422～000315**	**塩屋勝利・池崎譲二**	**24・25**	**鴻臚館17次**
0008	**44**	**平和台球場跡地**	**史跡内**	**確認調査**	**1,750**	**000425～010316**	**塩屋勝利・池崎譲二**	**25**	**鴻臚館18次**
0060	45	警固中脇土塁	史跡内	公園整備	110	010105～010131	井澤洋一		
0064	46	肥前堀	史跡外	ビル建設	160	010302～010330	横山邦継		
0109	47	平和台球場跡地	史跡内	確認調査	2,000	010521～020329	折尾　学・池崎譲二		鴻臚館19次
0129	48	大手門	史跡内	確認調査		011002～020329	井澤洋一		

凡例　・太字箇所は本報告掲載分
・確認調査：福岡城跡・鴻臚館跡の調査
・史跡整備：教育委員会所管事業に伴う調査
・公園整備：都市整備局所管事業に伴う調査
・工事名のある調査：開発に伴う緊急調査

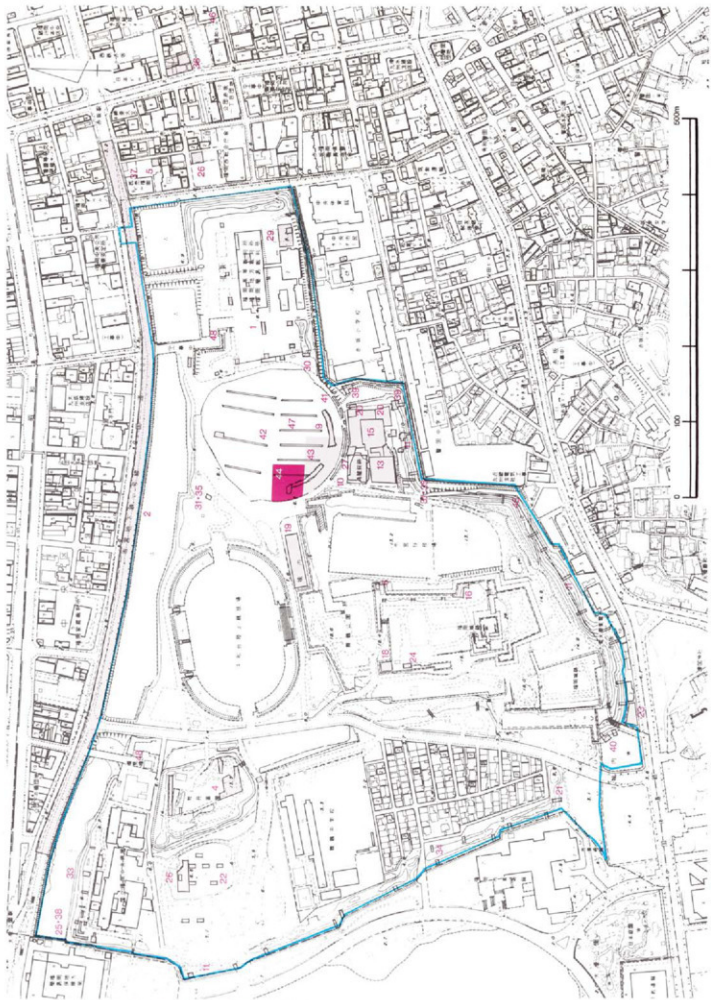


Fig. 2 福岡城内既往発掘調査区位置図（1/5000）

3．平成12年度の調査事業概要

（2）発掘調査の組織

1）調査および整備指導

鴻臚館跡調査研究指導委員会（第7期1年次）

委員長	九州大学名誉教授	横山　浩一	考古学
副委員長	学習院大学教授	笹山　晴生	国史学
委員	財団法人元興寺文化財研究所所長	坪井　清足	考古学
	奈良国立文化財研究所長	町田　章	考古学
	福岡大学教授	小田富士雄	考古学
	九州大学教授	西谷　正	考古学
	九州大学名誉教授	川添　昭二	国史学
	京都学園大学教授	八木　充	国史学
	京都橘女子大学教授	狩野　久	国史学
	東京大学教授	佐藤　信	国史学
	前奈良国立文化財研究所長	鈴木　嘉吉	建築史学
	九州芸術工科大学名誉教授	澤村　仁	建築史学
	九州芸術工科大学教授	杉本　正美	造園学
	工学院大学教授	渡辺　定夫	都市工学
	京都造形芸術大学教授	中村　一	造園学

2）発掘調査事業主体

調査主体	福岡市教育委員会	教育長	生田征生
調査総括		文化財部長	柳田純孝
庶務担当		文化財整備課長	上村忠明
		管理係長	井上和光
		管理係	河野淳美
	平成13年度調査	管理係長	山坪敏郎
		管理係	中岳　圭
調査担当		文化財部課長（鴻臚館跡調査担当）	塩屋勝利
	平成13年度調査	文化財部課長（鴻臚館跡調査担当）	折尾　学
		文化財部主査（鴻臚館跡調査担当）	池崎譲二

（2）調査事業の概要

1）鴻臚館跡調査研究指導委員会

鴻臚館跡調査研究指導委員会委員をはじめ、文化庁、福岡県、福岡市関連部局の出席のもとに、平成12年12月7日と8日に開催した。7日は発掘調査現場の視察を行い、平成12年度調査で新たに検出された堀北側の第Ⅱ期布掘り柱穴列などの遺構及び出土遺物の検討を行った。翌8日に会議を行った。

主な議事は、平成11年度発掘調査と平成12年度調査の中間報告と調査内容の検討、今後の発掘調査の進め方、及び13年度以降の長期調査計画の検討である。その結果、①遺跡内容が当初予想よりも濃密であることから、第Ⅳ期調査を2年間延長すること、②平成13年度調査は、今回検出した堀北側の第Ⅱ期布掘り柱穴列の東南角の発見に全力を注ぐこと、③特別史跡指定に向けて範囲確認調査を実施すること等が確認された。会議終了後、委員長、副委員長によって、平成12年度の調査成果と検討内容の記者発表が行われた。

Fig. 3　鴻臚館跡調査研究指導委員会現地視察

2）発掘調査

平和台野球場跡地の本格的発掘調査の初年次であった平成11年度は、第Ⅰ期調査で確認していた筑紫館・鴻臚館建物の北側の広がりを探る目的で、旧野球場右中間スタンド及びグランド部分約3,500㎡を対象に実施した。その結果、既知の筑紫館・鴻臚館建物の北側に東西方向にのびる堀が見つかり、古代瓦の出土状況などから堀北側にも筑紫館・鴻臚館時代の建物の存在が想定され、またその堀を南北に繋ぐ陸橋状の埋め立てが検出された。詳細については「鴻臚館跡11－福岡市埋蔵文化財調査報告書第695集2001」で報告した。

平成12年度は堀北側に具体的にどのような建物遺構が存在するのか、その確認を最大目標として実施した。詳細は本編第2章で報告する。

Fig. 4　埋蔵文化財センターによる瓦敷き遺構型取り

3）公開事業

鴻臚館跡調査に対する市民の期待と関心が高いことから、調査区北側芝生広場から、発掘調査の状況を常時公開し、発掘調査の解説パネルを掲示した。

また、現地説明会を平成12年8月26日と12月17日の2回開催し、それぞれ413名、237名延べ650名の見学者が訪れた。

発掘調査のビデオ記録の撮影を行い、平成11年度調査の成果をＤＶＤにまとめ、福岡市博物館作製のビデオ「鴻臚館跡の調査」とともに鴻臚館跡展示館に新設したビデオコーナーで公開した。

Fig. 5　現地説明会風景

第２章　平成11･12年度発掘調査報告

１．発掘調査の経過

平成11年度は平和台野球場跡地の南半部分（第Ⅳ期調査）の初年度にあたり、南西側1/4（球場バックスクリーンから右中間）約3,500㎡を対象とした。グランド部分で東西に走る谷が検出され、大量の鴻臚館関係瓦を廃棄する中世の池が見つかり、さらに連隊建物基礎も良好に遺存していたため、当初予想より手間取り平成11年度調査区の一部は、平成12年度も継続調査した。

平成12年度調査区は、平成11年度調査区の北に接した西側部分（ライト側）、約2,000㎡を対象とした。主な調査の経過は次の通りである。

４月25日　発掘準備開始
５月８日　平成12年度調査区表土剥ぎ開始（～12日）スタンド部分連隊遺構の検出
　平成11年度調査未了部分を先行調査
６月　梅雨　大雨でたびたび現場冠水
　28日　平成11年度調査後半の調査成果に関する記者発表
７月３日　SD1045（堀）下半の調査開始
　大量の廃棄された瓦に混じって、丸瓦、鬼瓦、イスラム陶器等が出土
　５日　SG1046（中世池）瓦の分類仕分け開始　南北斜面で出土傾向の違う可能性
８月26日　第１回現地説明会　参加者413人
９月25日　平成12年度調査区グランド部分遺構出開始　南北に走る布掘りを確認
10月４日　布掘り東西列を確認
　23日　スタンド部分連隊遺構調査終了
11月９日　SG1054（古代池）調査開始　焼土多し
12月７日　指導委員会現地視察
　８日　指導委員会会議、記者発表
　17日　第２回現地説明会　参加者237人
　20日　年内調査終了
１月10日　現場再開
　19日　SD1116老司系瓦20余点一括出土
　24日　中山春夫氏（中山平次郎氏の甥　90歳）来跡
　29日　埋戻し砂搬入・瓦洗浄開始
　31日　埋戻し開始（～２月３日）
３月16日　調査の後かたづけ、調査完了

Fig. 6　平成12年度調査区調査前風景

Fig. 7　平成12年度調査区表土剥ぎ風景

Fig. 8　ラジコンヘリコプターによる写真撮影

Tab. 4　平成11年度調査区検出遺構一覧

遺構番号	種　類	時　期
SD1001	排水溝	昭和20～23年
SX1002	バックスクリーン基礎	昭和24～25年
SX1003	〃	〃
SX1004	〃	〃
SX1005	〃	〃
SX1006	〃	〃
SX1007	〃	〃
SX1008	〃	〃
SX1009	上管継手掘方	〃
SX1010	排水工管掘方	〃
SX1011	ラッキーゾーンフェンス基礎	〃
SX1012	ケーブル工管掘方	〃
SX1013	土管排水掘方	〃
SK1014	柱　穴？	？
SK1015	土　壙	奈良～平安
SK1016	土壙（布掘？）	〃
SB1017	連隊建物	近　代
SB1018	〃	〃
SD1019	雨落ち溝	〃
SD1020	建物基礎	〃
SD1021	〃	〃
SD1022	〃	〃
SD1023	〃	〃
SD1024	暗渠排水	〃
SD1025	雨落ち溝	〃
SD1026	建物基礎	〃
SD1027	〃	〃
SB1028	連隊建物	〃
SK1029	土　壙	江　戸
SD1030	建物基礎	近　代
SK1031	土　壙	平　安
SX1032	バックスクリーン撹乱	戦　後
SX1033	バックスクリーン基礎	〃
SK1034	柱　穴	奈良・平安？
SK1035	土　壙	戦　後
SK1036	〃	〃
SB1037	瓦溜まり	中　世
SK1038	土　壙	江　戸
SK1039	瓦溜まり	古　代
SK1040	土　壙	戦　後
SK1041	土　壙	平　安

遺構番号	種　類	時　期
SK1042	土　壙	古　代
SK1043	瓦溜まり	近　代
SM1044	埋立造成	奈　良
SD1045	堀	奈良・平安
SG1046	池状遺構	中　世
SM1047	埋立造成	江戸初頭
SX1048	スコアボード撹乱	戦　後
SD1049	自然地形谷	奈良以前
SX1050	バックスクリーン基礎	戦　後
SX1051	〃	〃
SX1052	瓦溜まり	近代
SK1053	土　壙	江戸
SG1054	池状遺構	奈良
SF1055	犬走り状通路	奈良・平安
SD1056	側　溝	〃
SD1057	溝	中　世
SK1058	瓦溜まり	古代か
SA1059	布掘り掘立柱列	奈　良
SF1060	通　路	奈良・平安
SX1061	電柱アンカー	近　代
SX1062	電柱掘方	〃
SK1063	土　壙	不　明
SK1064	土　壙	近　代
SK1065	焼土溜まり	近　代
SK1066	土　壙	不　明
SX1067	連隊溜め桝	近　代
SK1068	バックスクリーン基礎	近　代
DK1069	柱　穴	奈良・平安
SB1070	掘立柱建物	奈　良
SK1071	柱　穴	奈良・平安
SK1072	柱　穴？	〃
SK1073	球場基礎	戦　後
SK1074	柱穴？	不　明
SK1075	土　壙	平　安
SK1076	土　壙	平　安
SK1077	瓦溜まり	不　明
SX1078	瓦敷き遺構	平　安
SX1079	瓦溜まり	平　安
SK1080	土壙	奈　良
SD1081	溝	中　世

2．平成11年度調査区の遺構と遺物

平成11年度の調査は、第Ⅳ期調査の初年度であった。野球場南側（展示館側）で既に確認されている遺構群の、北側への広がりを確認するに適当な位置として、野球場跡地南西部（バックスクリーンから右中間にかけて）の約3,500㎡を対象として実施した。当初予想では、スタンド部分の遺構遺存状態は、期待できるものの、グランド部分は野球場造成時に削平され、遺構の残りは悪いものと考えられていた。しかし、ここでは東西に走る深さ3.5ｍ以上の堀（SD1045）があり、中世段階では池（SG1046）に変化し大量の瓦が廃棄され、さらに古代の水溜状の池（SG1054）まで検出された。これら予想を上回る規模の遺構と遺物量から、単年度で調査を終了することができず、平成12年度も継続調査した。「鴻臚館跡11－福岡市埋蔵文化財調査報告書第695集－2001」で、平成11年度調査区の遺構遺物については概ね報告しているが、ここでは補遺として、SG1046の瓦、SD1045、SG1054について述べる。

ＳＧ１０４６（Fig.９～12，Pl.１・19）

堀遺構SD1045が自然堆積により埋没し、室町時代以降池となった遺構である。室町期に小規模な寺院的性格の建物が造営され、その際鴻臚館の廃墟を整地し大量の瓦等を池に廃棄している。瓦以外の遺物については前回報告書に示したとおりであるが、瓦の総量はTab.４に示すようにほぼ14ｔにも及ぶ膨大な量で、整理に多大な時間を要したため、今回に譲った。以下出土瓦の概要について述べる。

鬼瓦（Pl.19）　いずれも破片で全体形を示すものはないが、奈良時代のものが多い。

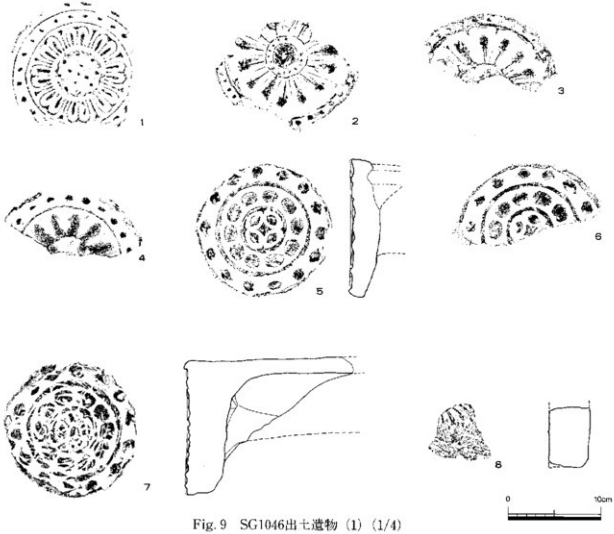


Fig.９　SG1046出土遺物（1）（1/4）

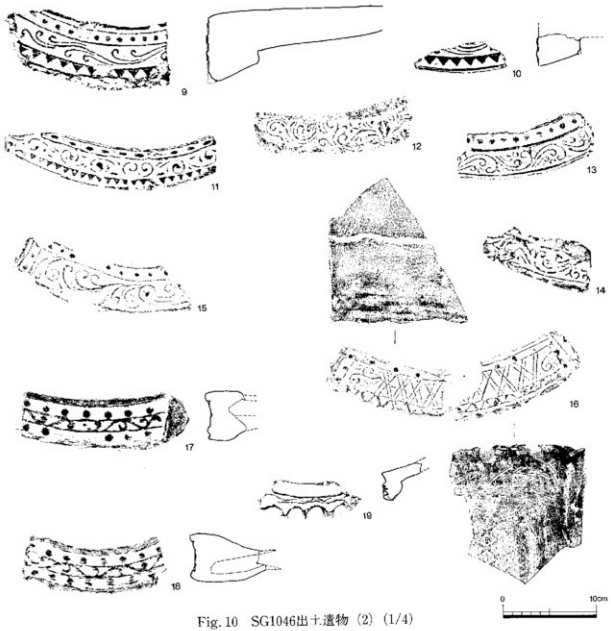


Fig. 10　SG1046出土遺物（2）（1/4）

以下使用する型式名は「大宰府史跡出土軒瓦・甲打痕文字瓦型式一覧」九州歴史資料館2000による。

軒丸瓦（Fig. 9－1～8，Pl.19）

1は223型式（鴻臚館式）で、内区は突出表現の８枚複弁で間弁があり、中房は一段高く１＋４＋８の蓮子、外区内縁は連珠文、外縁は素文となる。量は最も多い。２・３は082A型式で、内区は14枚の単弁、素弁を突出表現し、中房は半球形文で周囲に連珠文帯を持つ。外区は一段高い外縁に連珠文帯を持つ。胎土には石英粒を多く含み、焼成も甘い。４は065型式で、内区は12枚の単弁、素弁を突出表現し、中房には１＋７の大きな蓮子が付き、外区内縁には珠文帯がある。５～７は049型式で、中房には方形に近い蓮子を中心に４個の杏仁形蓮子が巡り、内区には杏仁形に変化した弁が10個配され、外区にも同様の珠文が14個配される。７は瓦当笵が二重写しになったものである。石英粒を多く含み胎土は粗いが、焼成は堅く、表面が黒色に熔化することが多い。池の北側斜面で多く検出されている。８は軒平瓦Fig.10－20に伴う花弁文の瓦当文様を持つものであるが、本遺跡での出土例はこの１点のみである。

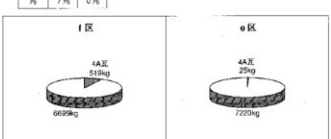
Tab. 4　9910　SG1046　e区・f区　瓦集計表

※単位はKg

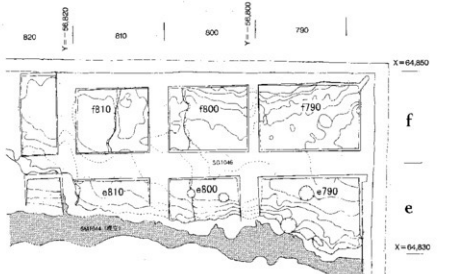
	網目		無文		不明		1	2A	2B	2C		3Aa		3Ab		3Ac1		3Ac2	3Ba1	3Ba2	3Ba3	3Bb	3Bb2	3Bb3	3Bd1	4A		4Ba	4Bb	5A		5B	5C	6A		6B		6C	6D	6E		6F	6G	金
	平	丸	平	丸	平	丸	平	平	平	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	平	平	平	丸	平	丸	平	平	丸	平	丸	平	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	計
f790	661.5	41	91.5	8	634.5	114	2	0.15	0.1			248.5	36	28	10	21	4	1	11.2		17		7		1	5.5		1.5		106.5	4.5	0.5	1.5		8		3.5	1	3.5		1.5		1		0.1		0.5		2.5	2154
f800	874.8	25	509.2	244.9	853.8	62.6		0.3		3	2	268.1	76	43.5	11.9	10.8	5	5	4	15.8	0.5	2.1		1	0.15	4.2	0.5	0.1	1	1	208	56	6.3	10.3	4	1.7	0.65	6.8	1	1.8			1		2	0.5		1.1	2	3.05	3350
e810	323.5	25	8		396	153.5						89	31	21	12.5	6	5		4											113	28															1218
合計	1860	91	609	326	1886	330	2	0.5	3	2	3	604	145	93	34	38	14	6	4	31	1	19		8	1.2	10	1	2	1	1	431	88	0.8	12	4	10	0.1	12	2	5		2	1	1	2	0.6		1.6	2	5.6	6702
e790	955.5	20	564	224.5	1009	132						248	69.5	121	52	115	8			62	14					0.4					11		0.2	0.8	12	1.5	7.5	1	7.5	0.4	16		13		1		0.3			3644
e800	970	37	500	249	674.4	74.9	0.4		1.2		4	266.4	106.8	193.7	67	157	28	2		21.8		4.4	1	4	1	1.4	1.6			4	1	6.7	3	0.1	0.9		19	4	9.4	3	15		28	1	28	1	13	0.2	1	0.3		0.2	3535
e810	11.3	0.8	5.1	1.9	10	1.1			0.4		0	4	0.7	1.3	0.2	1.6	0.3									0.3					1.2	0.2				0.1				0.7			0.2							41.5
合計	1937	57	1059	475	1693	208	0.4		2		4	546	167	316	119	273	36	2		84	14	4	1	4	1	1.8	2			4	1	11	14	0.1	1.1	1	31	5.5	17	4	23	0.4	44	1.2	38	1	14	0.2	1	0.3		0.2	7220

※総重量（e＋f）：13919kg

単位:kg	f区	e区
4A瓦	519	25
総数	6702	7220
%	7%	0%



Tab. 5　SD1046　e区・f区　4A瓦出土割合グラフ



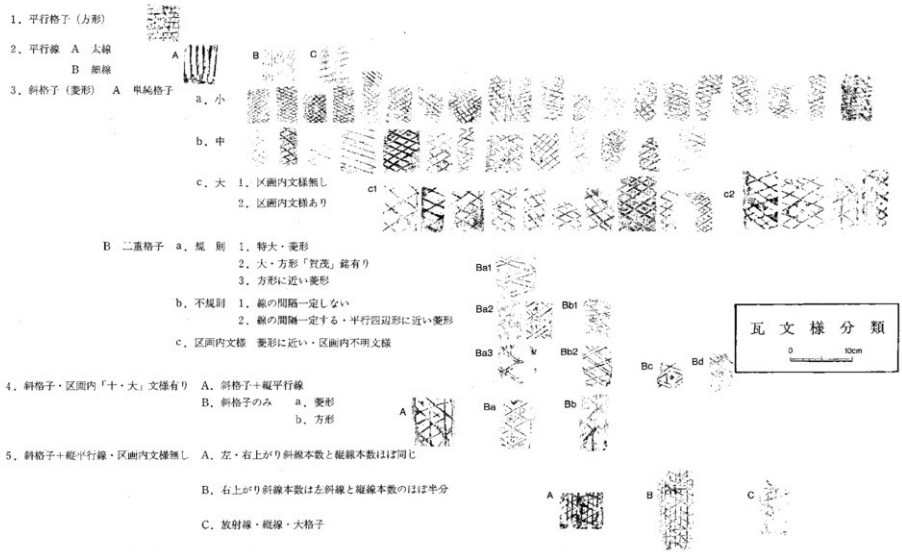


Fig. 12　瓦叩き目文様分類基準

軒平瓦（Fig.10－10～20，Pl.19）

9・10は560B型式（老司Ⅱ式）で、内区に扁行唐草文、上外区に連珠文、下外区に下向きの陽起連続鋸歯文を配す。本遺跡ではこれまでの調査で出土していない。いずれも北側斜面からの検出である。11は650型式（鴻臚館式）で、量は最も多い。内区に均整唐草文、上外区に吉仁形連珠文、下外区に下向きの陽起連続鋸歯文を配す。12～14は662型式で、内区に木葉状文を中心飾とした均整唐草文を配し、一段高い上下外区、脇区には連珠文を配す。15は666B型式で、内区に車輪状文を中心飾とした唐草文を配するが、唐草文は左右不均衡である。上外区と左脇区に連珠文を配す。16は515E型式で、内区に二重格子文を配し、両脇に左向きの唐草文を置く。上外区と左右脇区には連珠文、下外区には凸線鋸歯文を配す。大粒の石英粒を含むが、焼成は堅い。17・18は605型式で、狭い内区に右向きの扁行唐草文を配す。唐草は不連続の鉤状である。上下外区は幅広で連珠文を配す。瓦当裏面に平瓦を大きく包み込んでいる。全体に粗雑な印象であるが、焼成は良好で堅く、表面が黒色に熔化することも多く、硬質の須恵器のような印象である。製作技法、胎土、焼成状況から、軒丸瓦049型式（Fig.9－5～7）とセット関係にあると考えられる。池の北側斜面で多く検出されている。19は大宰府瓦型式に含まれていないが、博多遺跡群、箱崎遺跡群、大宰府史跡、斜ヶ浦瓦窯などで出土しており、平安時代後半に位置づけられるものである。薄手で、瓦当下端を押圧し、波状の文様にしたものである。小片が1点出土しているが、本遺跡では希有な例である。

瓦分析（Tab.4、5，Fig.11、12）

中世後半期の池（SG1046）からは、明や朝鮮時代の陶磁器を含んではいるものの、鴻臚館に由来する大量の瓦や陶磁器が出土している。軒先瓦については先述したとおりであるが、出土遺物の大半は平瓦、丸瓦である。池の南北両側から、瓦が投棄されているという状況から、堀北側にも鴻臚館建物があったという推定根拠の一つともなった。また、調査段階から南北斜面瓦の叩目文様構成比に違いがある印象があったので、南北の瓦を比較することによって堀南北建物の比較情報が得られるのではないかと考えた。

まず、叩目文様をFig.12のように分類し、その基準に従って仕分けを行い、種類ごとに重量を量り各グリッドごとに集計した。その結果がTab.4である。Fig.12のようにe区が南側斜面、f区が北側斜面と考えていい。この中で4Aに分類された叩き文様に、南北で明確な量の差違がある。Tab.5のとおりf区（北側斜面）で519kgに対し、e区（南側斜面）では25kgと極端に少なくなる。4Aの叩き目を持つ瓦は、軒丸瓦049型式（Fig.9－5～7）、軒平瓦605型式（Fig.10－18・19）と胎土、焼成も共通で一連のグループであり、北側に多いという出土傾向も同じである。この瓦は概ね11世紀代と考えられている。このことから、鴻臚館終末期には堀北側に鴻臚館建物は収斂され、南側に大きな建物は作られていなかった可能性が考えられる。野球場南側の調査で10世紀以降の建物が確認されなかったのも、このようなことによるのかもしれない。

瓦分析の成果の一部を示したが、仕分け作業には技術的に困難な面がある。大量の瓦を区別するには大勢の人手に頼らざるを得ない。このような中で、叩き後のナデ整形による無文、表面風化などによる不明も量としては多く、また時期の違う様々な格子叩きを峻別するのも困難である。今回は単純格子目を一括して扱ったのもそのような理由からであり、より正確で有効なデータの収集法については今後の課題としたい。

ＳＤ１０４５（Fig.13～21，Pl.2・3、19～21）

自然地形の谷を南北から遮成（SM1044）し、南北を繋ぐ陸橋状築堤によって、西側が池状遺構（SG1054）、東側を堀（SD1045）としたものである。南北両斜面とも中位に犬走り状平坦面を持つ二

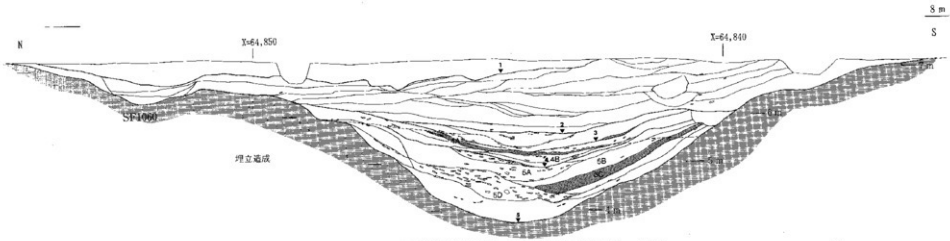


Fig.13－1.　SD1045 南北土層断面図　東壁　Y=-56,828ライン　(1/80)

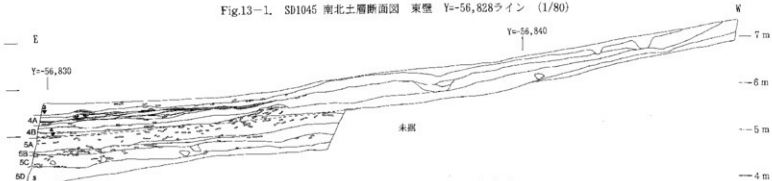


Fig.13－2.　SD1045 谷頭東西土層断面図　南壁　(1/80)

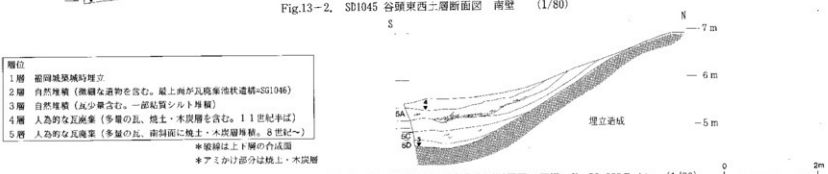


Fig.13－3.　SD1045 谷頭南北土層断面図　西壁　Y=-56,828ライン　(1/80)

段構造で、現状でも深さ3.45mを測る規模の大きな堀である。堀は築造後次第に堆積し、次第に浅くなり、最終的には福岡城築城時に平坦地となった。遺物量、廃土量から堀西端部の一部のみ最下面まで調査している。堆積土層は大きく5層に分けられる。下層から順に述べる。5層―築造直後から自然堆積が始まり、途中人為的な多量の瓦の廃棄が見られ、南斜面に焼土、木炭がある。4層―溝中位平坦面まで堆積が進み、底は浅い皿状をなし、南北両側から大量の瓦が廃棄され、最上面には焼土、木炭層がある。最上面は出土遺物から11世紀半ばに位置づけられ、鴻臚館の廃絶時期を示している。3層―自然堆積による瓦、陶磁器を含むが、人為的な大量廃棄はない。2層―微細な瓦、陶磁器破片を含む自然堆積で、最上面は中世池（SG1046）となる。1層―福岡城築城時埋め立てである。以下各層の出土遺物について述べるが、Fig.14・15は層位をより細かく正確に捉えるために、堆積土の一部をブロックサンプル的に調査した資料である。

3層出土遺物（Fig.14－1～7）：1は越州窯系青磁碗、2～6は白磁Ⅺ類碗、7は高麗の黒色陶器である。4A層出土遺物（Fig.14－8～19）：8～12は越州窯系青磁碗、13～16は白磁Ⅺ類碗、17は中国製陶器こね鉢の口縁部、18・19は土師器である。4B層出土遺物（Fig.14－20～21）：いずれも越州窯系青磁碗で、20には内面口縁直下に帯状の毛彫りがある。5A層出土遺物（Fig.15－22～28）：22は碁笥底の越州窯系青磁鉢、23は白磁Ⅺ類碗、24・25は中国製陶器、26・27は土師器、28は

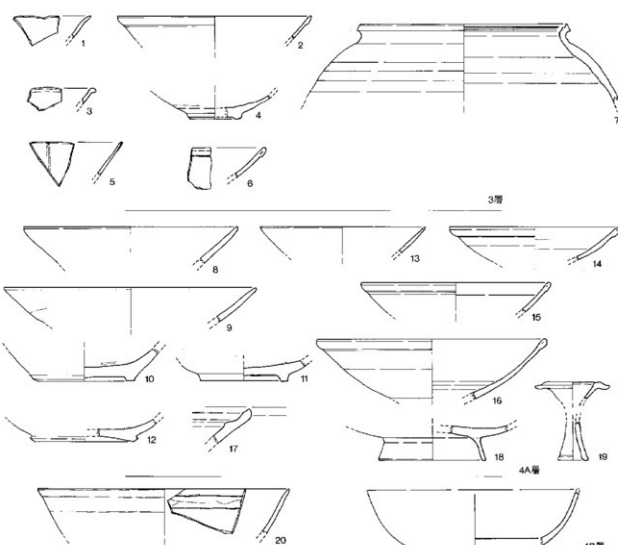


Fig.14　SD1045　ブロックサンプリング3層、4A層、4B層出土遺物（1/3）

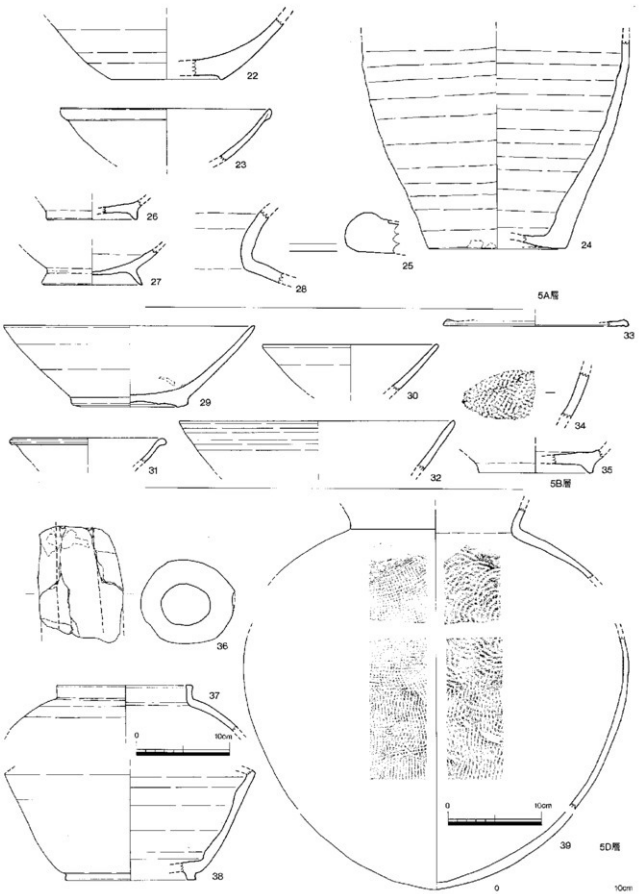


Fig. 15　SD1045　ブロックサンプリング５Ａ層、５Ｂ層、５Ｄ層出土遺物（1/3、37・39は1/4）

須恵器である。5C層出土遺物（Fig.15－20～35）：29～32は越州窯系青磁碗、33・34は須恵器、35は土師器である。5D層出土遺物（Fig.15－36～39）：36は輪羽口、37は須恵器広口短頸壺、38は須恵器長頸壺破片、39は丸底の須恵器甕である。

Fig.16～21はブロックサンプリング以外の出土遺物で、層位ごとに述べる。

2層出土遺物（Fig.16－40～42）：40・41は越州窯系青磁碗、42は中国製陶器壺である。3層出土遺物（Fig.16－43～52）：43～49は越州窯系青磁碗、49には内底に毛彫りがある。50・51は白磁XI類III、碗、52は須恵器である。3層シルト層出土遺物（Fig.16－53～65）：53～59は越州窯系青磁碗、60は越州窯系青磁水注取っ手、3本のひもをつないでいる。61は白磁X類碗、62はI類碗、63は黒褐釉の中国陶器盞、64・65は須恵器である。4層出土遺物（Fig.17－66～95）：66～70は越州窯系青磁碗、71は越州窯系青磁壺、72は白磁V類碗、73～75は白磁XI類碗、77・78は白磁I類碗、79～88は須恵器、89～92は新羅陶器、93～95は土師器である。4層下半出土遺物（Fig.18－96～124）：96～102は越州窯系青磁碗で、96には内面に花文がある。103は越州窯系青磁鉢、104は水注、105は黄釉褐彩陶器、106・107は青磁系の陶器壺である。108～112は白磁XI類碗、113は長沙窯系黄釉陶器、114は黒褐釉陶器灯盞、115～117は中国陶器、118～120は新羅陶器、121～123は土師器、124は縦耳の付く軟質須恵質の陶器である。5層上半出土遺物（Fig.19－125～130）：125は線彫り魚文を持つ越州窯青磁壺、126は黒褐釉陶器鉢、127・128は白磁I類碗、129は須恵器蓋、130は焼成不良の須恵器壺である。5層出土遺物（Fig.19－131～155）：131～138は越州窯系青磁碗、鉢、139は越州窯系青磁耳付壺、140～143は中国陶器四耳壺、144～149は新羅陶器、150・151は土師器、152～155は須恵器で、155は破片の内面を利用した転用硯である。5層下半出土遺物（Fig.20－156～169）：156～158は越

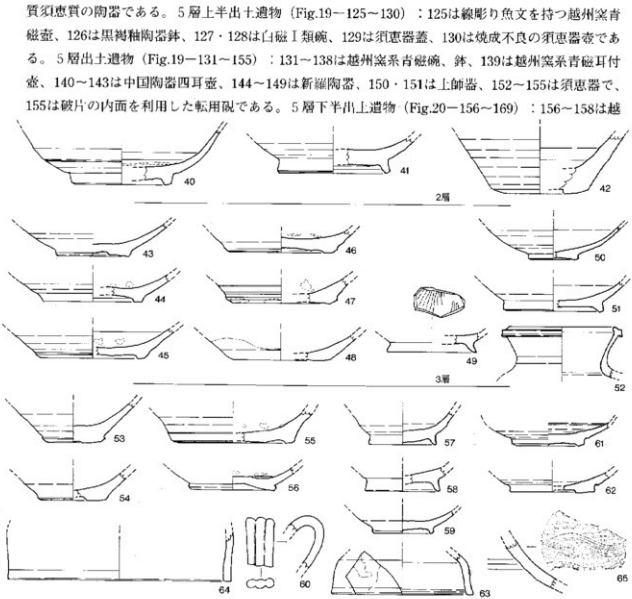


Fig. 16　SD1045　2層、3層、3層シルト層出土遺物（1/3）

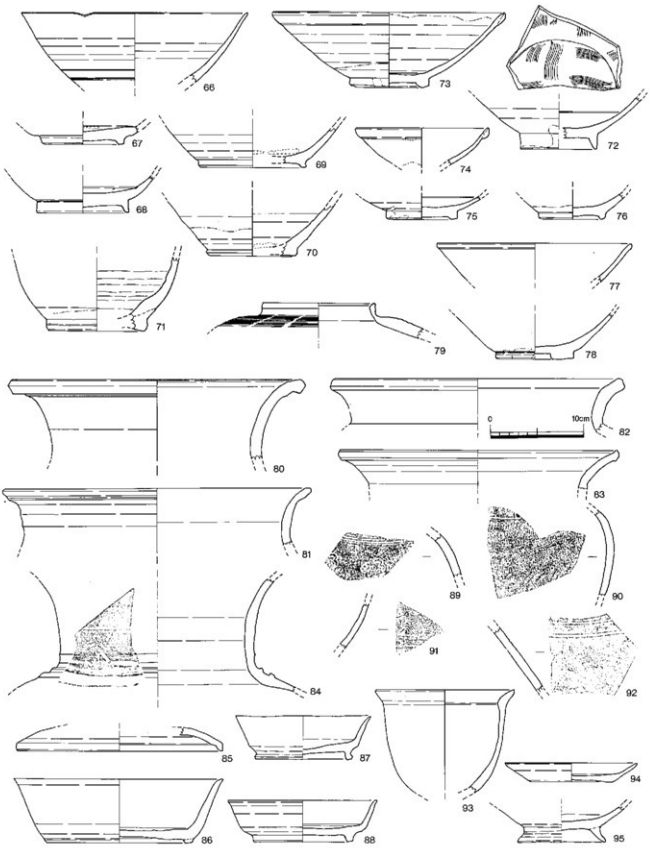


Fig. 17　SD1045　4層出土遺物（1/3、82は1/4）　0　10cm

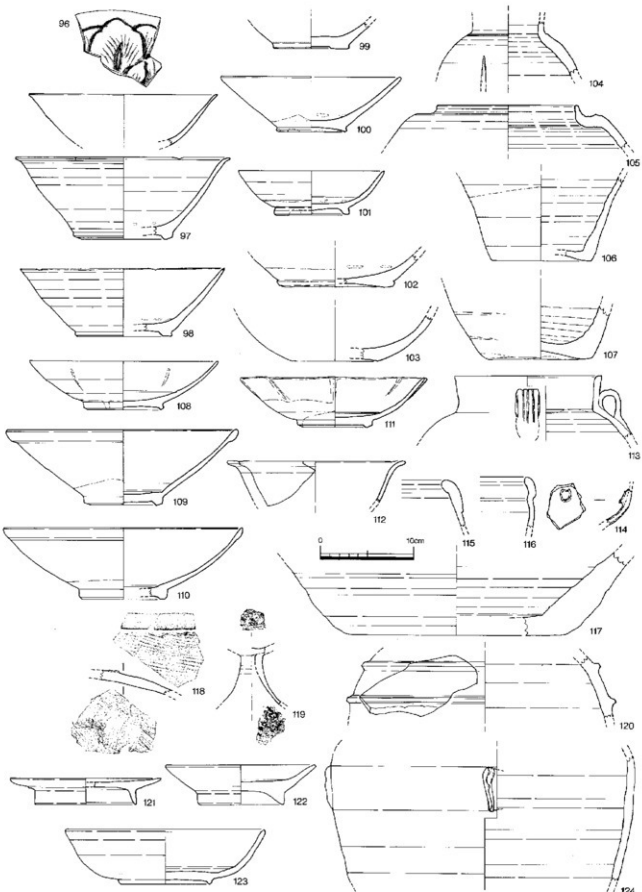


Fig. 18　SD1045　4層下部出土遺物（1/3、117は1/4）

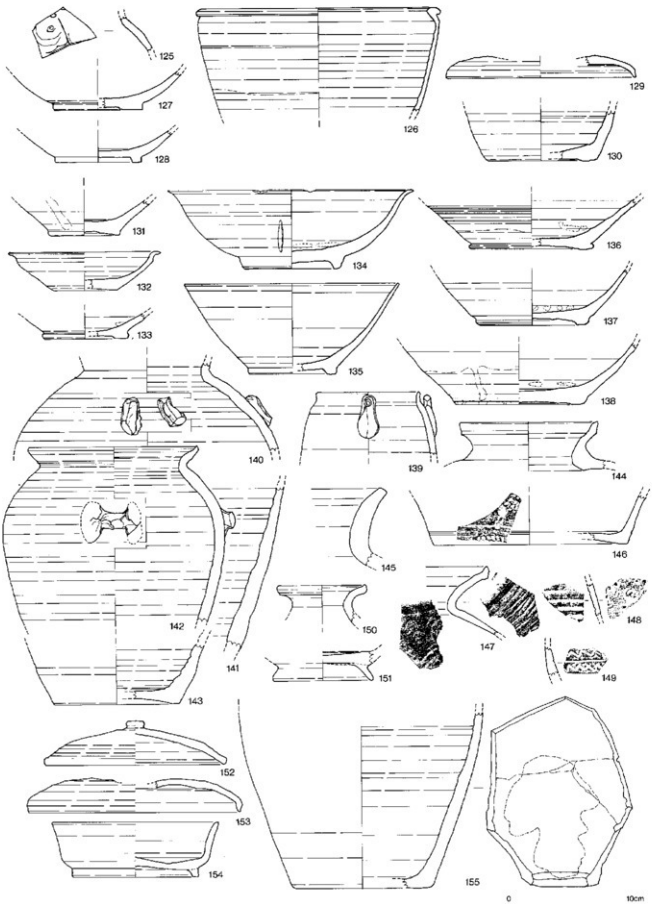


Fig. 19　SD1045　5層出土遺物（1/3）

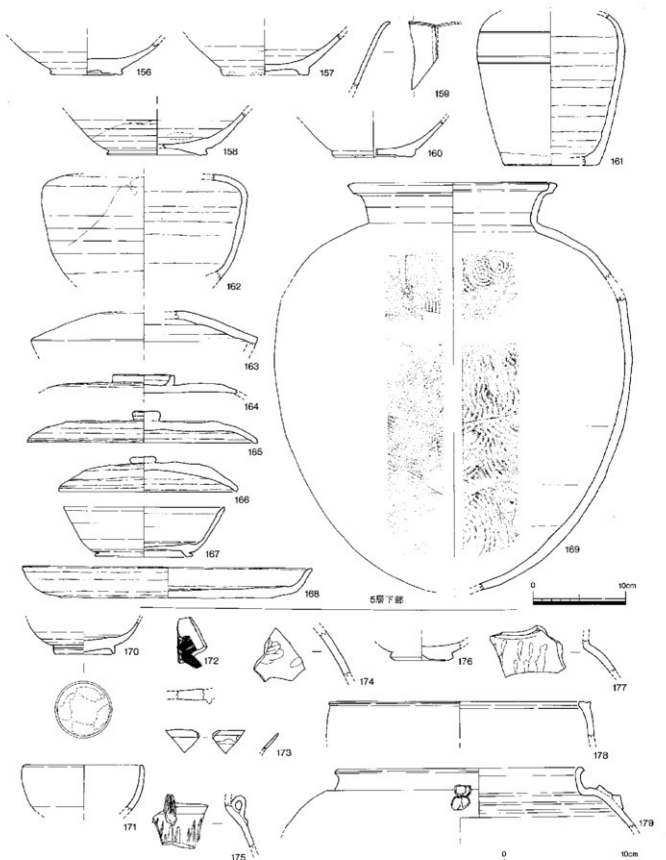


Fig. 20　SD1045　5層下部出土遺物、採集遺物　　3、169は1/4)

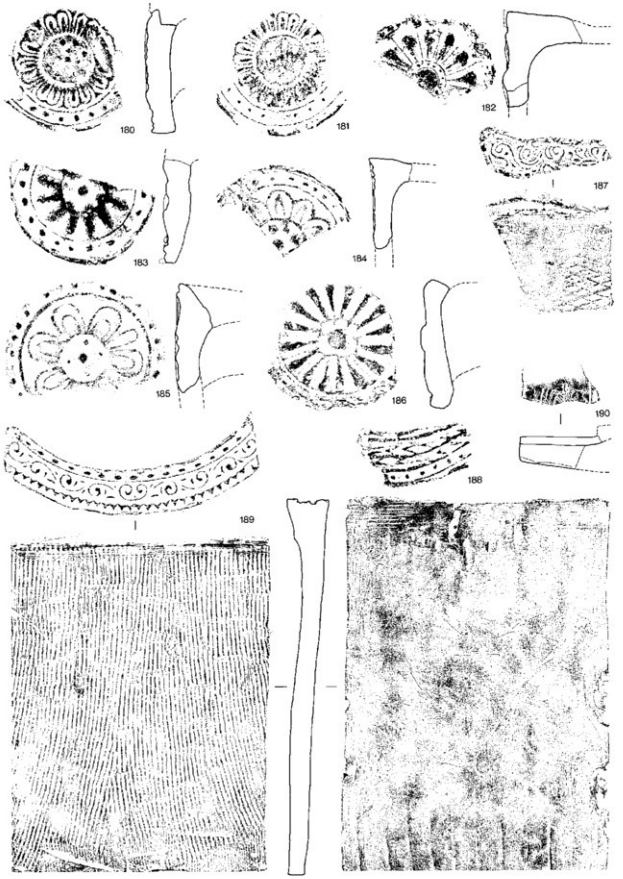


Fig. 21　SD1045　出土遺物　瓦類（1/4）

州窯系青磁碗、159・160は白磁Ⅰ類碗、161は新羅陶器三筋壺、162～169は須恵器である。SD1045採集遺物（Fig.20－170～179）：調査前の採集遺物である。170～173は越州窯系青磁碗で、172・173には内面に片切彫り、線描きの文様がある。174・175は越州窯系青磁壺で外面に線描き、片切彫り文様がある。176は長沙窯系陶器碗、177は長沙窯系陶器黄釉褐彩壺、178は越州窯系青磁鉢、179は褐釉陶器四耳壺である。

瓦類（Fig.21－180～191，Pl.19）　鬼瓦（Pl.19）：企窖を示すものはないが、大宰府政庁Ⅱ期に類するものが多い。Pl.19－Cは菊ノ尾遺跡出土品に類似する。軒丸瓦（Fig.20－180～187）：180・181は鴻臚館式、182は大宰府082A型式、183は065型式、184は135B型式、185は132型式、186は082B型式である。軒平瓦（Fig.20－188～190）：187は662A型式、188は691Ab型式か、189は鴻臚館式635A型式の完形品である。190は丸瓦玉縁凸面にヘラ描き文字が見られるが判読できない。

ＳＧ１０５４（Fig.22、23、24　Pl.4）

堀の造成事業の段階での南北を繋ぐ陸橋状埋立は土堤の役割も兼ねており、その西側に造られた水

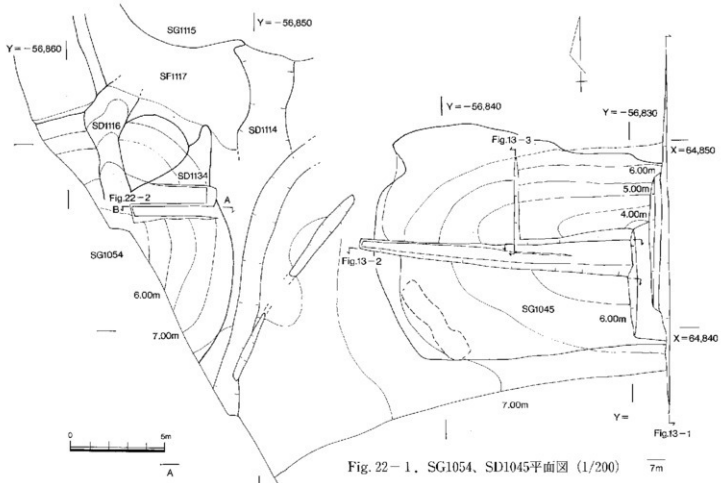


Fig. 22－1，SG1054、SD1045平面図（1/200）

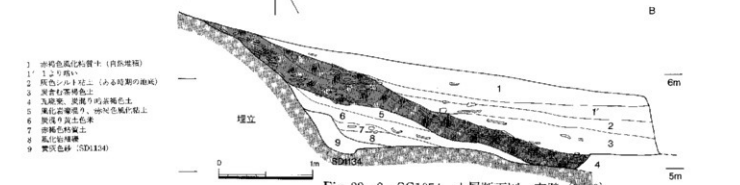


Fig. 22－2，SG1054　土層断面図　南壁（1/40）

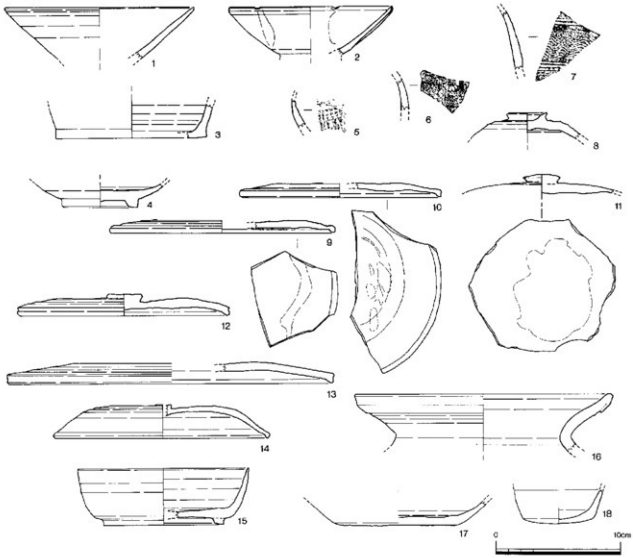


Fig. 23　SG1054　瓦堆積中出土遺物（1/3）

溜遺構（池）がSG1054である。遺構は野球場外野スタンド擁壁西側に広がっており、深い遺構のため最下面までの調査は、壁面崩落の危険性から実施しておらず、その全容は今後の調査に譲りたいが、周辺の雨水等を溝（SD1116）で引き込み、用水池としての役割があったものと考えられる。オーバーフローした水は十堤を越え東の堀に流れ込む。Fig.22－2のように、この池には先ず北からの流路SD1134があり、その後東土堤側から、２層の木炭、焼土に混じって瓦等の遺物が廃棄されている。間層を挟まず、時期差はないと思われる。廃棄後すぐに自然堆積が始まり、以降大量廃棄は見られない。廃棄されている瓦はほぼ鴻臚館式（40～42）単純である。遺物は瓦堆積中から出土したものと土層確認トレンチから出土したもの（Fig.24－19～39）を分けて掲示した。瓦堆積中出土遺物（Fig.23－1～18）：１は越州窯青磁Ⅰ類碗、２は定窯系白磁輪花碗、３は長沙窯黄釉陶器水注、４は越州窯系青磁壺であるが内外面無釉、５～８は新羅陶器である。９～11は須恵器杯蓋であるが、内面天井部を硯面とした転用硯、12～16は須恵器、17・18は土師器である。トレンチ木炭層より上面からの出土遺物（Fig.24－19～24）：19～22は須恵器、23はヘラ研磨のある土師器皿、24は土師器製塩土器である。上部炭層出土遺物（Fig.24－25～33）：25は越州窯系青磁おろし目皿、26・27は白磁Ⅰ類碗、28～31は新羅陶器、32・33は須恵器である。下部炭層出土遺物（Fig.24－34～39）：34は長沙窯黄釉陶器碗、35～38は新羅陶器壺、39は須恵器杯身で低い立ち上がりを持つ。これらの一括廃棄遺物には一部７世紀代のものを含むものの、概ね８世紀前半から半ばまでのものであろう。

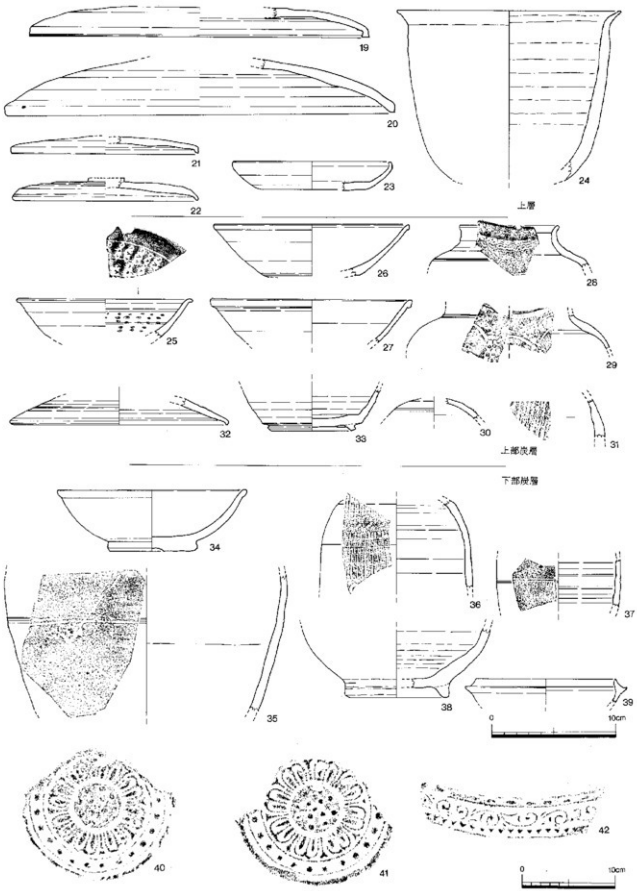


Fig. 24　SG1054　土層確認トレンチ出土遺物（1/3、40～42は1/4）

3．平成12年度調査区の時期別検出遺構と遺物

国指定史跡福岡城の区域は、鴻臚館以前から現在まで、数段階の土地利用の変遷をたどってきた。鴻臚館遺構の調査を行うには、それ以降の遺構の記録保存も必要となる。ここでは鴻臚館跡とは直接関係ない遺構も含めて、平成12年度調査区で検出された遺構について5期に分けて報告する。

Tab. 6　平成12年度調査区検出遺構一覧

遺構番号	種　類	時　期	遺構番号	種　類	時　期
SB1101	連隊物干場基礎	近　代	SK1118	土壙	奈良・平安
SE1102	井戸	中世～江戸	SX1119	埋立整地	江　戸
SK1103	土壙	中　世	SK1120	柱穴(?)	不　明
SA1104	布掘掘立柱列	奈　良	SK1121	土壙	平　安
SX1105	土壙	戦　後	SD1122	溝または土壙	奈良・平安
SX1106	土壙	戦　後	SK1123	土壙	奈良・平安
SX1107	土壙	戦　後	SK1124	石囲い土壙	奈良・平安
SX1108	土壙	戦　後	SK1125	石囲い土壙	奈良・平安
SX1109	土壙	戦前・後	SK1126	柱穴(?)	戦前・後
SK1110	土壙	平　安	SK1127	土壙	戦前・後
SK1111	欠番		SK1128	土壙	奈　良
SK1112	欠番		SK1129	柱穴	平　安
SK1113	欠番		SB1130	掘立柱物干場	戦　前
SD1114	溝	奈良～平安	SM1131	福岡城整地	江　戸
SG1115	池状水溜	奈良～平安	SM1132	埋立事業	飛鳥～奈良
SD1116	溝	奈　良	SM1133	岩盤風化土	奈良以前
SF1117	瓦敷き整地	奈良～平安	SD1134	溝	奈　良

1）戦後構築物

昭和20年6月19日の福岡大空襲によって焼失した旧陸軍24連隊の跡地には、昭和23年10月福岡平和台総合運動場が建設され、第3回国体会場として利用された。サッカー競技場は昭和24年から25年にかけて、大規模な改修工事を加え、平和台野球場として生まれ変わった。この時期の遺構は大半は撹乱とでも言うべき遺構であるが、鴻臚館、福岡城関係の遺物が含まれており、遺物取り上げの必要からTab.6、Fig.27のように遺構番号を振っている。SX1105～1108は連隊瓦を大量に埋めた土壙で列をなすが、性格不明、国体関係遺構か。数条の溝も検出されている。

2）旧陸軍24連隊関係遺構

明治維新後、福岡城跡はしばらくの間福岡県庁として使用された。明治19年には陸軍歩兵24連隊が正式に福岡城跡に設置され、昭和20年の終戦まで約60年間兵営として使用された。前述の通り福岡大空襲によって大半は焼失したが、外野スタンド盛り土直下の基礎は良好に残っていた。

SB1017

平成11年度調査区で確認されていたSB1017の北端部が検出された。従来武器庫と考えられてきた

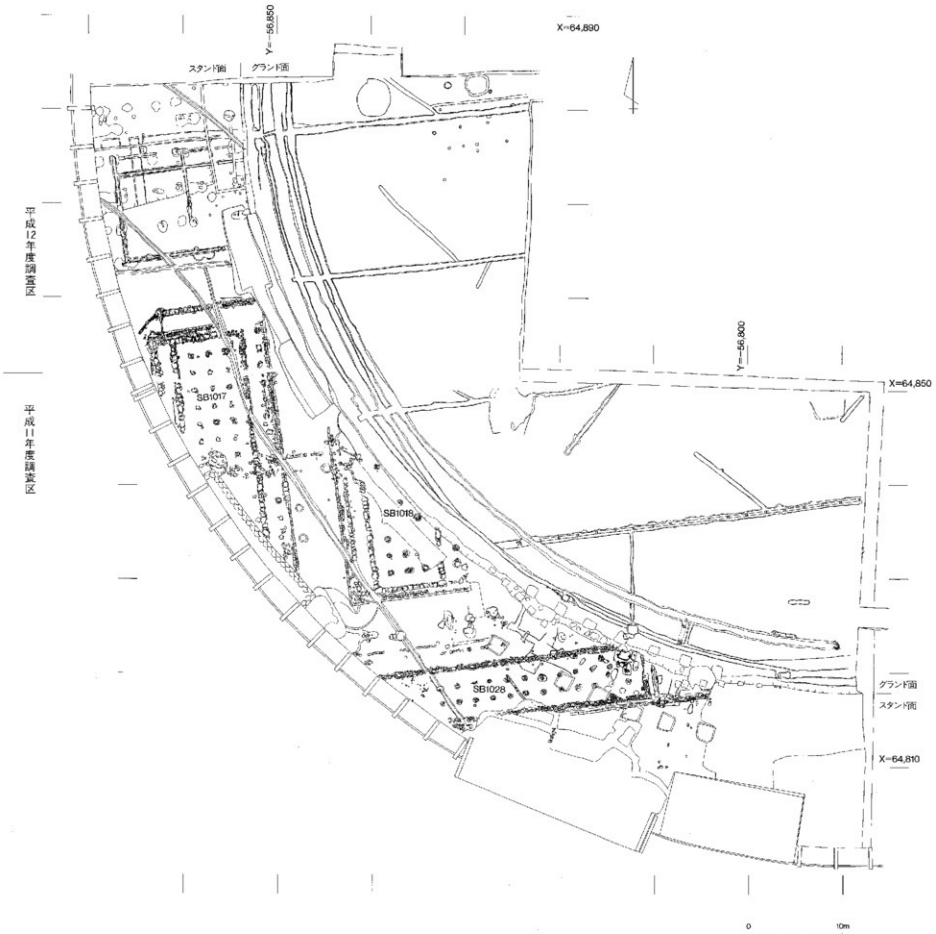


Fig. 25　平成11・12年度調査区　近世・近現代遺構平面図（1/400）

Fig. 26　平成11・12年度調査区　古代・中世遺構平面図（1/400）

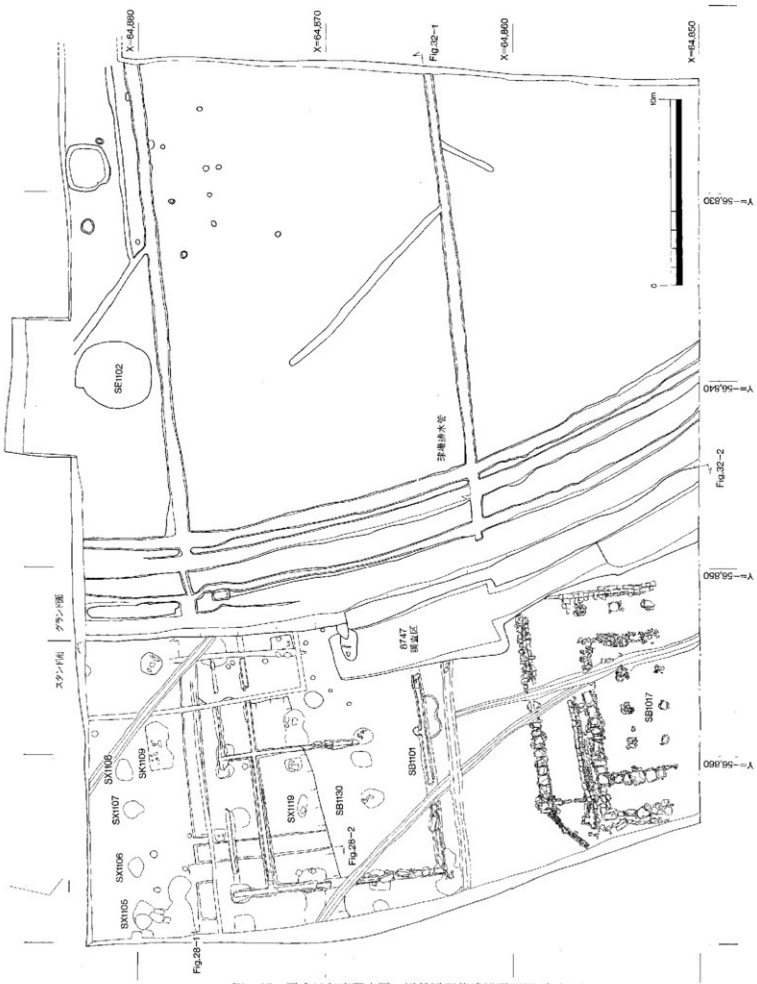


Fig. 27　平成12年度調査区　近世近現代遺構平面図（1/200）

礎石建物であるが、福岡市博物館蔵喜多嶋資料「既設福岡歩兵第二十連隊戎ヶ中隊兵舎新築図面」によると被服庫とされている。東接するSB1017で南端が確認されており建物規模が想定できる。すなわち母屋の梁行きは４間、桁行き16間の細長い礎石建物で、東西両面に各１間の庇、または廊下を持つ。建物の周囲は、花崗岩の切石で瓦を挟み込むようにしつらえた雨落ち溝が巡らされ、北側で石組み暗渠排水につながる。内面礎石は単独で設置されているが、側柱礎石は布掘り状に連続して大礫を並べ、頑丈な基礎としている。昭和20年の福岡大空襲による焦土が堆積し、礎石等の石材も被熱による割れが目立つ。本来は東西に並ぶ３棟の建物から成っていたが、平和台野球場のグランド部分の掘り下げで、東棟と中央棟の北半は削平されている。焦土中からは、歩兵銃薬莢、銃弾、軍服ボタンなど連隊関係遺物が多量出土している。Fig.30－１は江戸時代の焼き塩壺の身で、側面に長方形の印文があるが、内面の文字は風化して読めない。

ＳＢ１１０１・ＳＢ１１３０（Fig.27、30）

ライトスタンド直下で検出されたコンクリートベタ基礎の建物遺構である。北側に１間（1.8ｍ）の張り出しを持ち、南北５間（９ｍ）、東西８間（14.4ｍ）の区画と思われ、中央部に仕切がある。このコンクリート基礎の下面には、基礎と重複する形で柱穴が並んでおり、掘立柱建物（SB1130）から、コンクリート基礎建物（SB1101）へ立て替えがあった事を示している。この建物は被服庫の北に隣接しており、前述喜多嶋資料によると「物干場」とされている。床面整地層から近代遺物に混じってFig.30－２～４の遺物が出土している。２は外底回転ヘラ削りの土師皿で、口縁部に炭が付着し、灯明に使用したもの、３は龍泉窯系青磁と思われる小壺、４は越州窯系青磁の優品で、双層碗の上層部分である。国内出土品としては珍貴な例であろう。内外面全面施釉。

３）福岡城関係遺構

福岡城は国指定史跡であり、遺構検出の場合には慎重な取り扱いが求められる。平成12年度調査区は、城内を東西に横断する道路と北側大身屋敷地の一部に該当する。今回の調査区では、連隊遺構の下面に砂敷き硬化面があり、福岡城内の道路面ととして確認されるが、道路北端は確認できなかった。また、この道路北側にあった大身屋敷の遺構は、野球場グランドの削平によって、礎物基礎等は検出されていない。わずかに屋敷内の井戸（SE1102）１基と整地遺構（SX1119、SM1131）がみられるだけである。

ＳＥ１１０２（Fig.29、Pl.－９）

南北４ｍ、東西3.5ｍの大規模な掘方を持つ井戸で、現地表面から井戸底まで３ｍ以上の深さを持つ。深い掘方を掘るために、北東壁側に階段を造りながら掘り下げている。井筒は桶組で、径90cm、板材と竹のタガの痕跡が残る。掘方は井側の桶を重ねながら埋め戻されている。埋め土は透水性を高

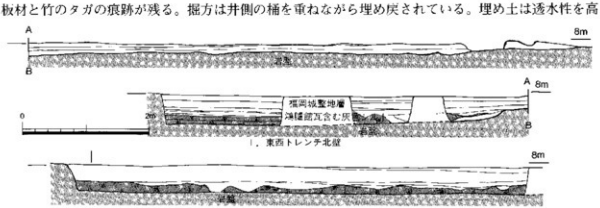


Fig.28　SX1119土層断面図（1/60）

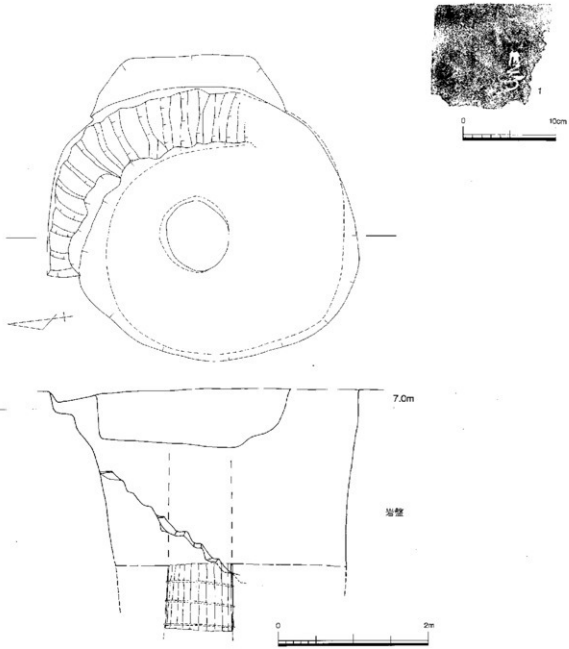


Fig. 29　SE1102実測図（1/50）、出土遺物（1/3）

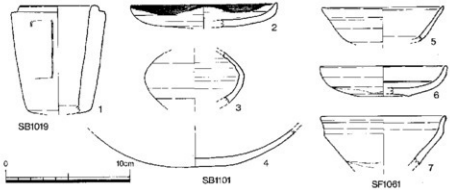


Fig. 30　SB1019、SB1101、SF1061出土遺物（1/3）

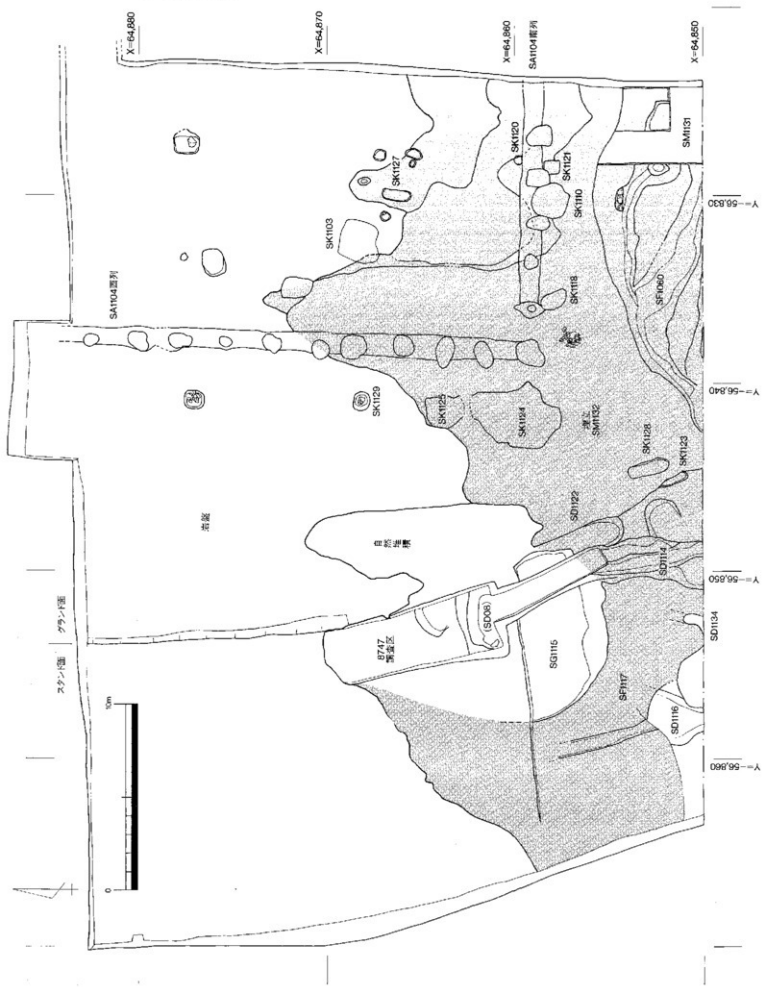


Fig. 31　平成12年度調査区　古代・中世遺構平面図（1/200）

めるように、大振りの風化岩礫と細かい礫を交互に埋めている。井筒内から「○○門」のスタンプのある江戸時代瓦（Fig.29－1）が出土している。通例江戸時代の井側は井戸瓦組が多いことから、この井戸は中世の井戸を江戸時代に埋めた可能性もある。

ＳＸ１１１９（Fig.28，Pl. 8）

岩盤の窪みの中世段階と思われる木溜まり状遺構を、福岡城の道路整地で埋め立てたものである。最下層の腐植土には鴻臚館関係瓦の細片が含まれる。

ＳＭ１１３１（Fig.31）

鴻臚館関係瓦を大量に廃棄された中世末期の池を福岡城築城時に埋め立てた遺構である。今回の調査区では南東隅にみられたのみである。

4）鴻臚館廃絶後から福岡城築城間の遺構

鴻臚館の廃絶後、堀跡は自然堆積により徐々に埋没し、中世末の段階では池（SG1046）となっている。中世には、これまでの調査で、小規模な寺院の存在したことが想定されている。

ＳＦ１０６０（Fig.30－5～7）

平成11年度調査で確認されていた遺構の延長部分である。堀埋没後陸橋状土堤の上を通り、中世池SGI046または自然堆積段階のSD1045に流れ込む流路である。土層断面図（Fig.13－1）の左端の窪みにあたる。図示した遺物は、5が口ハゲの白磁皿、6が平底の白磁皿、7が中国製天目碗である。

5）鴻臚館・筑紫館関係遺構

平成12年度の調査は、平成11年度の調査で想定された堀北側建物の存在を裏付けるのが主たる目標となった。グランド部分については、平和台野球場造成による削平を受け、遺構の遺存を危ぶむ見方もあったが、辛うじて深い遺構については検出することができた。また、谷造成の整地面も確認できた。以下、検出遺構を種類ごとに述べる。

埋立事業

ＳＭ１１３２（Fig.31、32，Pl.5、6）

野球場跡地内での調査で特筆すべき事の一つは大規模な造成工事が行われ、堀が造られていたことが明らかになったことである。平成12年度の調査でも堀北側の埋立造成が確認された。風化頁岩から成る基盤岩盤を削り、その残土

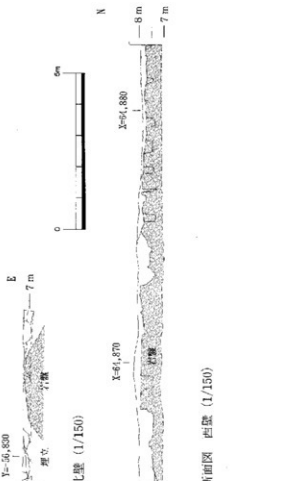


Fig.32－1．平成12年度調査区グランド部分東西土層断面図　北壁（1/150）

Fig.32－2．平成12年度調査区グランド・スタンド間南北土層断面図　西壁（1/150）

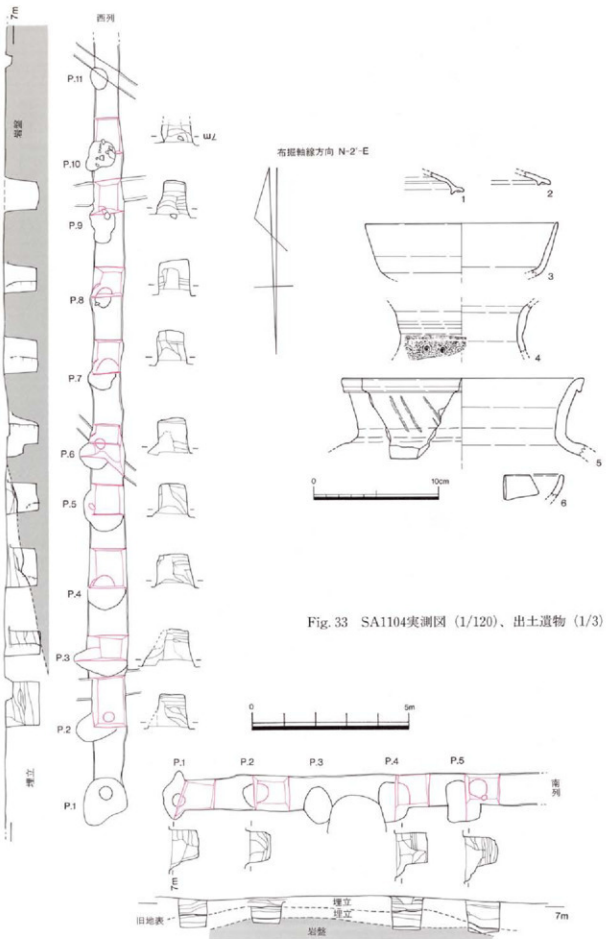


Fig. 33　SA1104実測図（1/120）、出土遺物（1/3）

で自然地形の谷を埋め立て造成し平坦面を造ったものである。SM1132はこの埋立造成事業である。Fig.31に示したとおり、地形変換線から、東に開析する大きな谷の北側に、南に向けて開析する幾つかの小支谷も認められ、造成前の微妙な自然地形が想定できる。なお、Fig.31、32－1に示すとおり、後述する布掘り掘立柱列（SA1104）の掘方は、埋め立て造成後に掘り込まれており、埋立が先行している事は明らかである。また、地形変換線の平面観察では布掘り区画内の整地層が、大きく東西に区分され、その境に旧地表面を示す黒色腐食土層を挟むことや、布掘り南列の上層（Fig.34）の観察でも埋立土の間に黒色腐植土を挟むことから、埋立は一時に実施されたものでなく、先ず東側の小規模な谷の埋立が先行し、しばらくの年月を経て、布掘り西列下面の谷埋め立てが行われていることを示している。また、未調査のため詳細不明ではあるが、先行する埋立土の中にも遺構の存在が確認されている。これは第Ⅱ期以前の遺構である。

布掘掘立柱列

ＳＡ１１０４（Fig.33、Pl.10－14）

グランド部分で南北約24ｍ（西列）、東西約14ｍ（南列）のＬ字状に布掘掘立柱列が検出された。平成11年度の調査で、堀北側に広がると想定された鴻臚館（筑紫館）関係建物の存在が、これによって初めて具体的に明らかになった。この布掘掘立柱列は建物区画（塀）の西南角にあたる。掘方の上面はグランド造成によって削平を受けているものの、深さ1.2ｍ前後、幅１ｍの遺存状態である。柱は抜き取られ柱痕は遺存していないものの、西列で11個、南列で５個の柱抜き跡が確認できた。柱の抜き取り方向は、西列が西側、南列が南側、即ち区画の外側向きである。柱間は平均2.3ｍを測る。西列と南列の布掘りは接しておらず、南列西端に１間分の隙間がある。布掘り時の作業用通路、あるいは通用門的な施設があったことを示すものであろうか。

布掘り西列の主軸は、堀南側第Ⅱ期遺構の布掘掘立柱列の西列軸線の延長線上に重なり、また方位もＮ－2°－Ｅと同一で、柱間も等しく、また南列軸線も堀南側第Ⅱ期遺構の東西軸線と平行である。柱の据え方には若干の相違があり、堀南側では布掘り底の一部を掘り下げ柱を据えるが、堀北側では布掘り底は平坦で、側面に柱を据える抉りを入れている。ともあれ、南北建物は同一の基準によって造られたものであり、ほぼ同時期に併存していたといえる。両建物の間隔は堀を挟んで約42ｍを測る。

遺構検出レベルは標高7.2ｍ、掘方底のレベルは6.2ｍであり、堀南側第Ⅱ期遺構の布掘掘立柱列検出レベルは標高8.5ｍ、掘方底のレベルは7.4ｍであって、両者間には１ｍ以上の標高差が認められる。南北建物は堀を挟んで北側が一段低い、いわば雛壇的平坦面に営まれたことを示すものであろう。

西列北側は風化岩の岩盤掘り込んでいるが、西列南側と南列は、先に述べたとおり、埋立土SM1132を掘り込んでおり、埋め立て後に造られたものであることは明かである。

布掘りの掘方埋土（Fig.33－１～４）と柱抜き跡（Fig.33－５、６）から若干の遺物が出土しており、遺構の存続期間を示す重要な資料である。掘方埋土からはいずれも小破片であるが、須恵器、新羅陶器があり、微細な土師器破片も含む。ここにはいわゆる初期貿易陶磁は含まれていない。１はかえりが付く杯蓋で、印花文は見られないが胎内面は小豆色に発色し新羅陶器であろう。２はかえりが付く須恵器杯蓋である。焼歪みが大きい。３は新羅陶器の杯身破片で、胎土表面はネズミ色を呈するが、内面は小豆色を呈す。４は新羅陶器壺の頸部破片で外面に印花文をめぐらす。明灰色を呈しやや軟質である。柱抜き穴では、南列Ｐ.５で出土遺物が図示できた。５は須恵器甕口縁部で、頸部にヘラによる斜めの刻線を施している。胎土外面は赤褐色を呈するが、内側はネズミ色である。６は定窯系白磁碗の口縁部破片で白磁Ⅰ類に分類される。胎は厚みを持ち口唇部は丸く収める。胎土は白色で精良、内外面に乳白色の釉を均質にかける。この他、須恵器甕・杯、ヘラ研磨のある土師器、新羅陶

器などの小破片がある。この他西列P.７から３点、P.８から２点の須恵器破片が出土している。瓦片も出土しているが微細で図示していない。掘方出土遺物は７世紀後半から８世紀初頭に位置付けられ、柱抜き穴出土遺物では白磁碗が最も新しく、８世紀半ば以降に位置付けられる。このことから布掘り掘立柱遺構は、少なくとも８世紀初頭から８世紀半ば以降までは存続したものと思われる。

土壙・溝・池等

スタンド・グランド間土層断面図（Fig.32－２）に示すとおり、野球場造成時にグランドは約１ｍ削平されている。このためグランド部分は深い遺構のみが残り、全体に遺構は少ない。ライトスタンド側はさほどの影響はないものの、北半の岩盤露呈部には、古代遺構は残っておらず、南半部分に池状遺構SG1115や埋め立て整地事業SM1132、その上面の瓦敷き遺構SF1117などが検出されている。

ＳＫ１１０３（Fig.34　Pl.18－１）

グランド中央部分の岩盤と埋め立て前の旧地表面堆積層をかすめるように掘り込まれた廃棄物処理土壙である。2.2×2.0ｍ、深さ0.4ｍでほぼ隅丸方形、底は二段になり大礫が混じる。遺物には図に示したように立ち上がりの高い須恵器杯身など、５世紀代のものや須恵器甕、新羅陶器、高麗陶器、越州窯系青磁Ⅰ・Ⅱ類、白磁Ⅰ・Ⅱ類、中国製陶器片等が混在しているが、土師質の擂り鉢もあり、遺構自体は室町時代のものである。１は旧地表面の堆積層に由来するものであろう。

ＳＤ１１１４（Fig.35－１）

池状遺構SG1115の南側に取り付く溝である。堆積上中に人為的な廃棄はなく、微細な遺物を含む自然堆積である。鴻臚館廃絶の前後窪みとなっていた池状遺構のオーバーフローした水が、陸橋状土堤の北詰めを経由してSG1045に流れ込む水路である。図示した遺物は白磁Ⅻ類碗である。

ＳＧ１１１５（Fig.32－２、35、36－２～19　Pl.15－１）

昭和62年度確認調査で検出されたSD08遺構と同じである。トレンチ調査のため広がりが明らかでなく、溝状遺構とされていた。今回の調査で広がりが把握でき、池状の水溜遺構であることが確認できた。Fig.32－２グランド・スタンド間南北土層断面図の北側岩盤と南側埋立整地層間の自然堆積部分がこれに当たる。昭和62年度確認調査での土層断面図Fig.35を参照する。北側から南に傾斜する風化頁岩岩盤があり、自然地形の谷傾斜を示している。堆積層は大きく３層に区分される。下層は南側の一段低くなった部分に堆積した、谷に流入した自然堆積層である。灰褐色粘質土が主体となる。中層は埋立整地SM1132によるもので谷中央部に向かって厚くなる。風化頁岩細礫、風化土からなる。埋

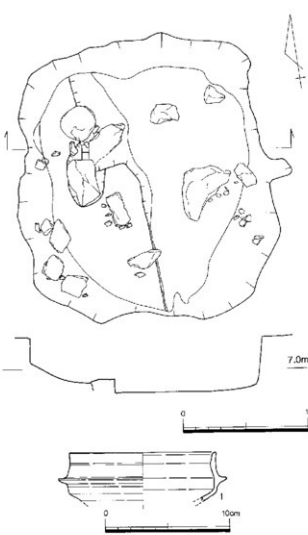


Fig. 34　SK1103実測図（1/30）、出土遺物（1/3）

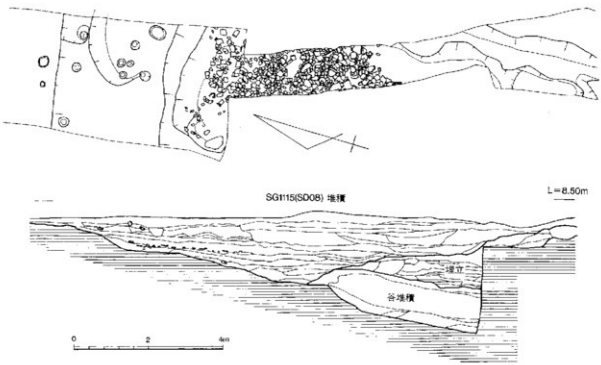


Fig. 35　昭和62年度調査　SD08(SG1115)平面図、土層断面図（1/100）

立整地はSG1115の東南西の３方向を取り囲むように実施され、窪地としての地形を作り出している。この窪地が水溜状の池遺構となっており、この中の堆積が上層である。自然堆積層であるが中位に大量の瓦が投棄されている層がある。SG1115の北東に接し、自然地形の小さな谷が存在するが、埋立整地はこの部分はされておらず、SG1115への水路となっている。この埋立のない小谷が、北側鴻臚館（筑紫館）建物の、一つの西区画を示すものであろう。

当初、ここに溜まった水はSD1134、1116などの溝を経由してSG1054に流され、さらにSD1045に流れ込むという経路をとっていたが、SG1054が埋没し、SG1115が浅くなった段階で直接SD1045に流れ込むようになっている。

平面プランと土層の確認を中心に調査を行ったため、多量の瓦廃棄層以下の掘り下げは行っていない。このため出土遺物（Fig.36－２～19）は瓦層以上のものである。２～４は越州窯系青磁碗で、２が幅の狭い輪高台のⅠ類、３は粗製のⅡ類で底部糸切りの例、４はⅢ類である。５は越州窯系青磁大型合子の身で、内外面施釉。６、７ともに越州窯系青磁精製品の壺または水注で、精良な胎土をもち、内面は無釉。８は越州窯系青磁碗Ⅰ類の範疇に入るもので、底厚である。９、10は白磁Ⅰ類碗である。11は新羅陶器壺で、厚めの体部の外面に、上下向き合った櫛描き波状文が施されている。12は中国製黒褐釉陶器の壺または水注で、高台を輪状に貼り付けている。13も中国製の大型の鉢と思われる陶器で、本来内面に褐釉または黒褐釉が施釉されていたものであるが、二次被熱により剥落している。胎土は灰色であるが磁質に近い。14は土師器高坏脚部で、縦方向のヘラ削りが行われる。15は土師器甕で、表面は荒れ調整不明であるが器壁は薄い。16は擬宝珠形の摘みをもつ杯蓋で、破片を長方形に整形して、内面天井部を硯面として利用した転用硯で、摘みを安定させる支脚としている。17は大型の須恵器甕の破片を利用した転用硯（猿面硯）である。側面を丁寧に研磨し、整形している。内面は使用のため磨耗が進んでいる。18は立ち上がりを持つ須恵器杯身で、６世紀後半代に位置づけられる。昭和62年度調査の下層谷堆積でも６世紀中頃から後半の須恵器が出土しており、筑紫館造営前に後期古墳の築造があったと想定されている。19は須恵器甕頸部で、３条のヘラ描き圏線にヘラ描きの大小の波状文が施されている。

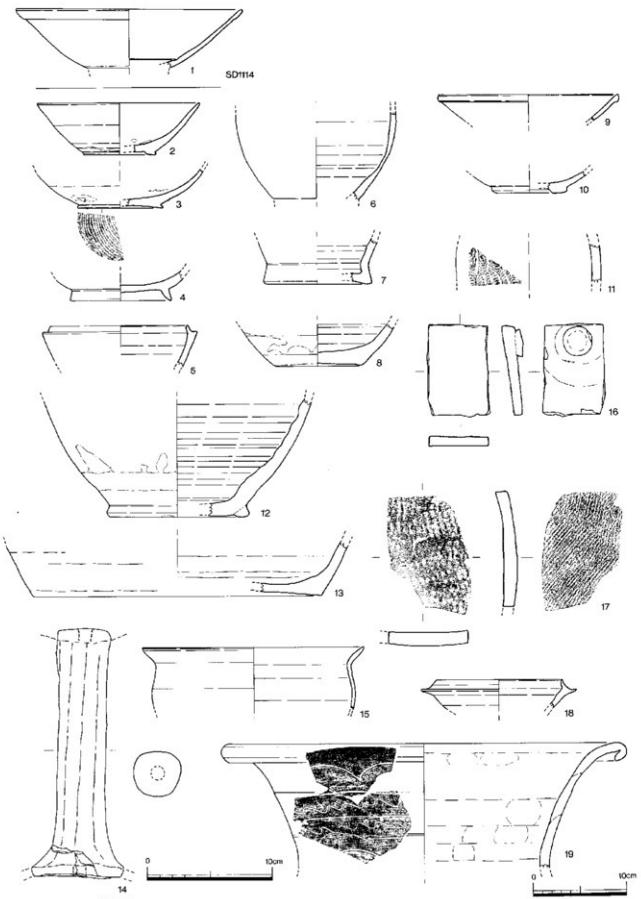


Fig. 36　SD1114、SG1115出土遺物（1/3、19は1/4）

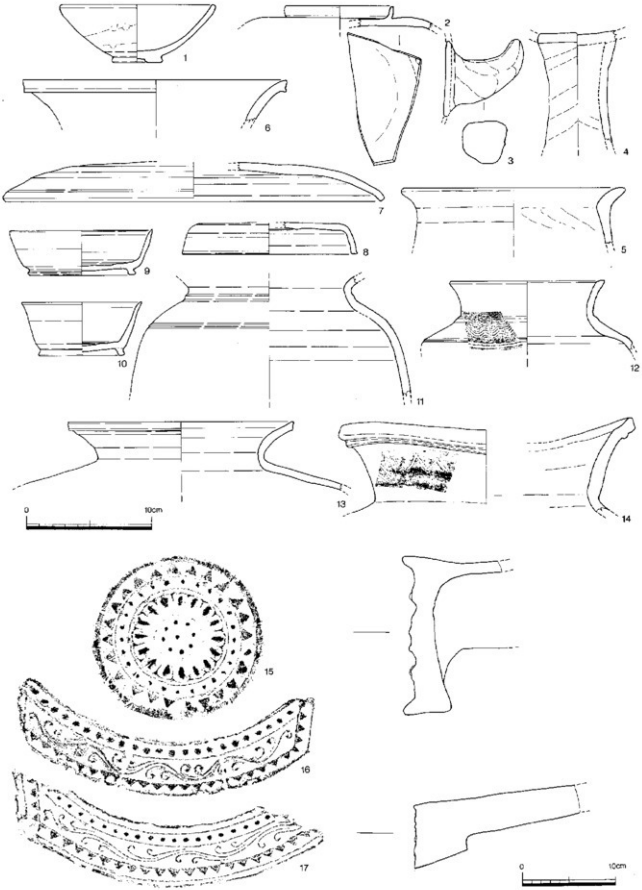


Fig. 37　SD1116出土遺物（1/3、15～17は1/4）

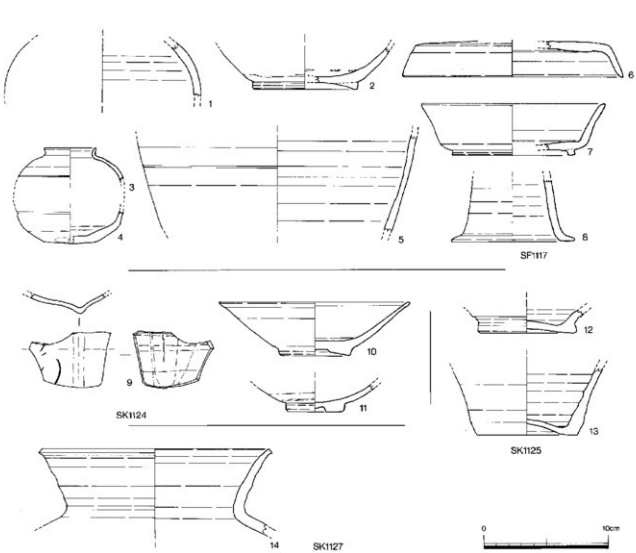


Fig. 38　SSF1117、SK1124、SK1125、SK1127出土遺物（1/3）

ＳＤ１１１６（Fig.22－１、37－１～17，Pl.16、17、19、22）

SG1115から埋め立て整地面を横断して南側池状遺構SG1054に流れ込む流路には、少なくとも３回の移り変わりがあり、SG1054埋没後はSD1114を経て直接SD1045に流れ込むようになる。SD1116は、SG1115に取り付く流路の一つである。SG1054北側斜面に浅い窪み状の溝となって、池に流下する。溝にはPl.16・17のように瓦が大量に流れ込んでおり、含まれる軒先瓦は軒丸瓦291型式（Fig.37－15）22点、軒平瓦560Aa型式（老司Ⅰ式、Fig.37－16）１点、560Ba型式（老司Ⅱ式、Fig.37－17）５点のみで、ほぼ老司系瓦単純といえる。老司系瓦の出土は、これまでの堀南側の鴻臚館調査では例がなく、高野孤鹿氏の採集遺物に２点含まれるのみで（池崎・森本1983）、その採集地点も本地点に隣接するナイター照明灯基礎部分である。基本的に北側建物にのみ使用されたものであろう。瓦以外の出土遺物は以下のとおりである。１は長沙窯の粗雑な抉りにより蛇の目高台を造る黄釉陶器碗である。二次被熱により釉はほとんどが剥落しているが、白化粧土が内面と外面上半に明瞭に残る。２は灰釉陶器蓋であるが、破片の内面天井を硯面とした転用硯である。磨耗し墨痕が残る。３～５は土師器でそれぞれ、甕把手、高坏脚部、甕である。７、８は須恵器杯蓋、９、10は須恵器杯身。11、12は瓦質に近い軟質の須恵器広口壺で、肩に２条の沈線、頸部直下に段状の突帯をめぐらす。13、14は須恵器甕で、14の頸部にはヘラ書きの文様が施されている。この他、図示できないが多量の甕、杯などの須恵器や、

新羅陶器の破片、少量の土師器破片が出土している。8世紀半ばの遺物群である。

ＳＦ１１１７（Fig.38－１～８，Pl.15－２、22）

SG1115、SG1054間に挟まれた、埋立整地面の上面に瓦破片を敷き詰めたテラス状平坦面である。堀の南北を繋ぐ階橋状土堤北詰の状況を示している。東側グランド部分は削平をうけ詳細は不明であるが、埋立整地は行われており、同様の平坦面が堀北側建物まで広がっていたものと思われる。瓦は鴻臚館式が中心ではあるが、先述の老司系軒丸瓦291型式が混在していることが指摘できる。平坦面の平面プランの調査を行い、瓦のほとんどは現況のまま埋め戻し、遺物は一部を取り上げたに過ぎない。１は唐三彩と思われる壺の胴部から肩部にかけての２点の破片である。釉薬は二次被熱により沸騰し、本来の色調をとどめていないが、少なくとも２種類以上の掛け分けがあり、わずかではあるが鉛釉に生じる虹色のスペクトル現象を見せていることから、唐三彩と考えられる。２は越州窯系青磁Ⅱ類碗、３・４は新羅陶器小壺、５は新羅陶器壺で胴部に沈線が巡る。６～８は須恵器で、それぞれ杯蓋、杯身高坏脚である。

ＳＫ１１１８

SA1104南列を切る浅い皿状の土壙で、瓦、礫に混じり、越州窯系青磁、新羅陶器、土師器、須恵器片が出土している。完掘していない。

ＳＫ１１２０

SA1104南列を切る浅く小さな攪乱である。上面輪郭の確認のみを行った。

ＳＫ１１２１（Pl.18－２）

SA1104南列に接する小さな土壙である。上面輪郭の確認のみを行った。

ＳＫ１１２２（Pl.18－３）

埋め立て層に掘り込まれた細長い土壙である。瓦片に混じって須恵器片等が出土している。

ＳＫ１１２３

グランド削平によりわずかな窪みとして確認できた土壙である。木炭片を多く含む。遺物は微量。

ＳＫ１１２４、ＳＫ１１２５（Fig.38，Pl.18－４・５、28）

SA1104西列の南端外側に位置する土壙である。上面窪みに礫を配している。布掘りにほぼ平行で、大（SK1124）、小（SK1125）の組み合わせであり、その位置関係に南側第Ⅱ期区画にともなう便所遺構と共通するものがあり、この土壙も便所である可能性がある。仮にそうであった場合、深くなる可能性があり、時間的制約から平成12年度は上面のみ調査を行い、埋め戻している。下層については平成14年度に調査を行う予定である。

上面には大きめの瓦破片が廃棄されているが、主体となるのは鴻臚館式である。Fig.38－９～11はSK1124出土遺物で、越州窯青磁の角形壺で外面に毛彫り文様を持つ。10は越州窯青磁蛇の目高台碗、11は長沙窯蛇の目高台碗である。12、13はSK1125出土遺物で、いずれも中国製陶器壺である。

ＳＫ１１２７（Fig.38，Pl.22）

古期埋め立てに掘り込まれた浅い土壙である。Fig.38－10は新羅陶器甕である。

ＳＫ１１２８

浅い土壙で、グランド削平によりわずかに床面が残る。木炭片を含む。

ＳＫ１１２９

径１ｍ程の浅い窪みで内面に30㎝前後の礫が数個置かれている。礎石下面の根石である可能性が高い。北９ｍに同様の遺構があり、この遺構をつなぐ線はSA1104西列に平行する。わずか２基の遺構であるが、北側第Ⅲ期礎石建物の一部である可能性が高い。将来の北側の調査によって明らかになろう。

３．平成12年度発掘調査のまとめ

平和台野球場跡地の調査は、鴻臚館跡の全容解明には不可欠であり、これまでに確認されていた遺構が、北側にどのような形で広がっているのか、期待されていた。一方、野球場グランド造成時に削平を受けたことで、遺構の遺存を危ぶむ悲観的な見方があったのも事実である。しかし、平成11年度の調査では、区域を南北に区分する東西に伸びる堀の存在が明らかになり、堀の中の瓦出土状況からその北側にも鴻臚館関係建物の存在が推定された。

平成12年度の調査区は、平成11年度調査区北側を約1750㎡を拡幅したもので、堀北側に具体的にどのような建物が展開していたのか期待された。その結果、以下のような事が明らかになった。

１）第Ⅱ期遺構の検出

堀を挟んで南側第Ⅱ期建物区画に対応する建物区画の布掘掘立柱列SA1104がＬ字状に検出された。北側第Ⅱ期建物区画の南西隅に当たるものである。堀北側で初めて建物遺構が検出されたことにより、鴻臚館（筑紫館）は、堀を挟んだ南北建物群から成る複合施設であることが明らかになり、これまでの鴻臚館のイメージを大きく変えることになった。南北の建物区画は、布掘掘立柱列よる塀であり、柱間が2.3ｍと等しく、さらに西側列の軸線、方位を同じくしていることから、同一基準によるものであり、ほぼ同時期に併存していたと考えられる。北側建物区画は、布掘出土遺物から少なくとも８世紀初頭から半ば以降までは存続したと考えられるが、南北布掘の柱掘え方の微妙な相違や、当該期の瓦が南側では鴻臚館式が中心となるのに対し、北側ではSG1054に北から流れ込むSG1116から老司系瓦がまとまって出土するなど、老司系瓦が鴻臚館式に加わるなどの違いがあり、建設年代に若干の差があると考えられる。老司系瓦の組み合わせから北側建物がやや新しいものと考えられる。

また、北側布掘の基底面標高は約6.2ｍ、南側布掘基底面の標高は約7.4ｍで、両者間には1.2ｍ程の標高差が認められる。これは堀を挟んで、北側建物造成面が南側より一段低い、いわば雛壇状を呈していたことを示している。

２）埋立事業

これまでの調査で、鴻臚館（筑紫館）の建設に当たっては、自然地形の丘陵を削平し、谷を埋立整地を行い、平坦面を造成していたことが明らかになっている。平成12年度調査区でも、グランド部分では削平を受けているものの埋立造成の面的広がりが確認できた。微妙な自然地形や造成前後の状況は土層変換線と土層断面にみることができる。これによると埋立整地は一度に行われたものではなく、大きく東西二回の段階に分けられる。先ず東側が小規模に埋立られ、しばらくの年月を経て地表面に黒色腐植土が形成され、のち西側が大規模に埋立られ、その整地面に第Ⅱ期建物布掘が掘り込まれることになる。整地面以下の調査は実施しておらず、Ⅱ期以前の状況は明確ではないが、先行する埋め立て土のなかにも遺構の存在が確認されている。また、５～７世紀の古墳時代の遺物が見受けられ、古墳または古墳時代遺構の存在したことがうかがえる。これら下面遺構の調査は今後の課題としたい。

埋立の面的広がりによって、陸橋状築堤北詰の状況も想定できる。グランド部分は削平によって一段掘り下げられているが、埋立は池状遺構SG1115南側を巡って陸橋状築堤につながっており、さらに西側に伸び、池状遺構SG1054の北側平坦面を形成している。すなわち南側から陸橋状築堤を渡りきると、正面に池があり、右に折れると北側建物に通じることとなる。左に折れると大量の瓦を敷き詰めた平坦面を通り西に向かう。池と池とを分割するよう埋立が行われ、平坦面が造られていることは西に通じる通路の役割があったと考えられ、西側にも鴻臚館関連施設のあったことが推定される。

3）ＳＧ１０４６出土瓦の分析から

中世池状遺構SG1046からは14ｔ近い量の鴻臚館関係瓦が出土している。南北建物の存続時期に相違があるかどうかを確認するために、南北斜面の瓦を分類、数量化し、比較を行った。その結果、11世紀代の瓦が、北側斜面に集中していることが明らかになった。北側斜面の瓦は池北側平坦面に由来するものと考えて差し支えなく、このことから終末期の鴻臚館建物は北側に収斂され、南側に大きな建物は作られていなかったという可能性が高まった。

4．平成13年度調査の速報

平成13年度は、鴻臚館跡調査研究指導委員会の指導により、平成12年度に検出された掘北側第Ⅱ期建物区画（布掘掘立柱列）の東南隅部分の検出を主要目標として調査区を設定した。その結果、次のような成果が得られた。

第Ⅱ期建物区画の東列が検出され、調査区北端ではこれに取り付く門の一部が確認された。東列の軸線は、南側建物の東列と同じであり、東南隅（想定）から門までの距離も等しい。このことから北側第Ⅱ期建物区画は、東側に門を持つという構造、軸線、規模ともに南側第Ⅱ期建物区画と同じであることから、Fig.39－1のように掘を挟んで南北にほぼ同時期に、相似形の建物区画が並列していたことになる。

第Ⅲ期礎石建物１棟が掘北側で初めて確認された。礎石自体は既に除去されており根石での検出である。東西に長い建物で、東西柱間が３ｍ、南北柱間が６ｍを測り、南側第Ⅲ期礎石建物西側棟の規格と同じである。史料に残されている「鴻臚北館」の一部であろう。今後の調査が期待される。

平成13年度調査結果の詳細については、次回報告書にて紹介する予定である。

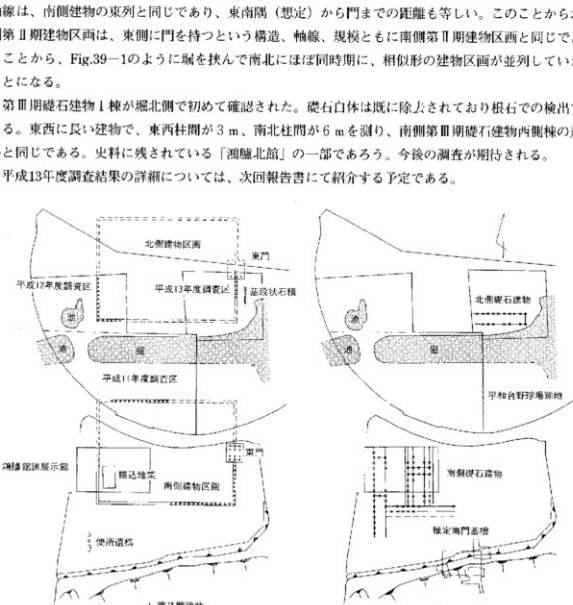


Fig. 39　鴻臚館跡検出建物遺構　平面概念図（1/2000）

付編1　Tab.7　福岡城跡・鴻臚館跡関係調査報告書一覧

1	福岡県教育委員会	「史跡福岡城発掘調査概報」	福岡県文化財調査報告書第34集1964
2	福岡市教育委員会	「筑前国福岡城三ノ丸御鷹屋敷」	福岡市第59集1980
3	福岡市教育委員会	「福岡城址－内堀外壁石積の調査－」	福岡市第101集1983
4	福岡市教育委員会	「筑前国福岡城三ノ丸御鷹屋敷図録編」	福岡市第59集1990
5	福岡市教育委員会	「福岡城肥前堀」	福岡市第131集1986
6	福岡市教育委員会	「福岡城跡・Ⅳ—内堀内壁の調査—」	福岡市第237集1991
7	福岡市教育委員会	「鴻臚館跡Ⅰ　発掘調査概報」	福岡市第270集1991
8	福岡市教育委員会	「福岡城肥前堀第3次調査報告」	福岡市第293集1992
9	福岡市教育委員会	「福岡城肥前堀第4次調査報告」	福岡市第294集1992
10	福岡市教育委員会	「鴻臚館跡Ⅱ」	福岡市第315集1992
11	福岡市教育委員会	「福岡城　月見櫓」	福岡市第316集1992
12	福岡市教育委員会	「鴻臚館跡Ⅲ」	福岡市第355集1993
13	福岡市教育委員会	「鴻臚館跡4　平成4年度発掘調査概要報告」	福岡市第372集1994
14	福岡市教育委員会	「福岡城跡第23次調査報告」	福岡市第415集1995
15	福岡市教育委員会	「鴻臚館跡5　平成5年度発掘調査概報」	福岡市第416集1995
16	福岡市教育委員会	「福岡城赤坂門跡—福岡城跡26次調査報告—」	福岡市第463集1996
17	福岡市教育委員会	「鴻臚館跡6　平成6年度発掘調査概要報告」	福岡市第486集1996
18	福岡市教育委員会	「鴻臚館跡7　—鴻臚館跡第Ⅰ期整備報告—」	福岡市第487集1996
19	福岡市教育委員会	「福岡城跡　—福岡城中堀跡の調査—」	福岡市第498集1997
20	福岡市教育委員会	「鴻臚館跡8　—平成7・8年度発掘調査概要報告—」	福岡市第545集1997
21	福岡市教育委員会	「史跡福岡城跡—東の丸の調査—」	福岡市第546集1997
22	福岡市教育委員会	「鴻臚館跡9　平成9年度発掘調査概要報告」	福岡市第586集1998
23	福岡市教育委員会	「鴻臚館跡10　平成10年度発掘調査概要報告」	福岡市第620集1999
24	福岡市教育委員会	「鴻臚館跡11　平成11年度発掘調査報告」	福岡市第695集2001
25	福岡市教育委員会	「鴻臚館跡12　平成12年度発掘調査報告」	福岡市第695集2002

（福岡市第…集は、福岡市埋蔵文化財調査報告書第…集の略）

付編2　Tab.8　大宰府鴻臚館関係主要文献一覧

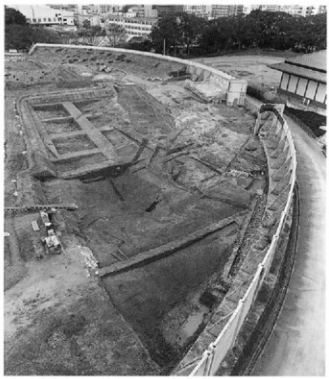
長野種正	「博多鴻臚館考」	1821
青柳種信・長野種正・青柳種春・坂田良貫	「筑前国続風土記拾遺」	1835
伊藤常足	『大宰管内誌』	1841
山崎藤四郎	『石城遺聞』1973復刻	1889
吉田東伍	『大日本地名辞書』	1901
藤井甚太郎	「三野城址等に就きての私疑」『考古学雑誌5－1』	1914
中山平次郎	「三野城址等に就きて藤井学士の示教に答ふ」『考古学雑誌5－3』	1914
中山平次郎	「九州北辺に於ける文化年間の烽火台　附　貞観年間設置の警固所の所在」『考古学雑誌5－7』	1915
中山平次郎	「古瓦散布地鴻臚館址與欠」『福岡日々新聞』	1915
中山平次郎	「鴻臚館の所在に就いて再び藤井学士の示教に答ふ」『考古学雑誌6－1』	1915
中山平次郎	「古瓦類雑考（1）～（12）」『考古学雑誌6－4～7－4』	1915～6
野々口永二郎	「筑紫大郡小郡及崑崙国と新羅人張宝高」『筑紫史談64』	1935
竹岡勝也	『上代の太宰府』『太宰府小史』	1952
中山平次郎	「万葉集から鴻臚館を拾う」『芸林1－4』	1954
竹内理三	「大宰府政所考」『史淵71』	1956

高野孤鹿「平和台出土の真和六年供養塔と土塔」「筑前古跡の遺物資料16」 1959
滝川政次郎「筑紫館と中島鴻臚館」「綜合法学32」 1961
川勝政太郎「平安京鴻臚館について」『古代学第10巻第2～4合併号』 1963
長沼賢海「新旧鴻臚館」『邪馬台国と大宰府』 1968
高野孤鹿『平和台の考古史料』プリント版　福岡市教育委員会蔵 1972
中井寅雄「歴史館と併用する鴻臚館復元について」『荒津文化2』 1972
緒方悦子「鴻臚館ものがたり」『荒津文化2』 1972
亀井明徳「大宰府鴻臚館の実像ー構造と遺跡の再検討」「古文化談叢第1号」 1974
田村圓澄「大宰府前史小論」「九州文化史研究紀要　第21号」 1976
亀井明徳「日本出土の越州窯陶磁器の諸問題」『九州歴史資料館研究論集第1号』 1975
森克己「新訂日宋貿易の研究」 1975
石松好雄「大宰府鴻臚館跡採集の古瓦」「鏡山猛先生古希記念古文化論攷」 1980
川添昭二「古代・中世の博多」『中世九州の政治と文化』 1981
亀井明徳「鴻臚館と九州の貿易陶磁」『日本やきもの集成12』 1982
池崎譲二・森本朝子「福岡市立歴史資料館所蔵の高野コレクション」「福岡市埋文調報第101集」 1983
弓場知紀「出光美術館の高野コレクション」「福岡市埋文調報第101集」 1983
田崎博之・矢野佳代子「九州大学考古学研究室所蔵の平和台出土遺物」「福岡市埋文調報第101集」 1983
西健一郎「外国使節往来の道」『MuseumKyusyu 9』 1983
八木充「筑紫大宰とその官制」『大宰府古文化論叢　上巻』 1983
倉住靖彦「那津官家の修造」『大宰府古文化論叢　上巻』 1983
高橋章「鴻臚館系瓦の様相」『大宰府古文化論叢　下巻』 1983
中山平次郎「古代の博多　岡崎敬校訂」 1984
渡辺正気「大宰府鴻臚館をめぐって－福岡市平和台遺跡ー」『古代の博多　付篇』 1984
八木充「いわゆる那津官家について」『日本古代政治組織の研究』 1986
亀井明徳『日本貿易陶磁史の研究』 1986
筑紫豊「筑紫鴻臚館について（遺稿）」「ふるさとの自然と歴史201」 1986
田村圓澄「大宰府創建考」『九州歴史資料館論集　第12号』 1987
北條秀樹「大宰府成立前史小論」「歴史と地理　第382号」 1987
朝日新聞福岡総局編『鴻臚館の時代〔はかた学1〕』 1988
柳田純孝「鴻臚館の発見」『東アジアの国際都市　博多　よみがえる中世　1』 1988
朝日新聞福岡総局編『古代の都市・博多〔はかた学2〕』 1989
朝日新聞福岡総局編『海が語る古代交流〔はかた学3〕』 1989
林田正男「筑紫館と万葉集」『九州大谷研究紀要15』 1989
平野邦雄　鴻臚館とは何か？　鴻臚館の時代①ー鴻都散策ー」『鴻都vol.4』 1990
西谷正「特輯『大宰府鴻臚館をめぐる諸問題』に寄せて」「古代文化42巻8号」 1990
林田正男「筑紫館と遣外使の歌」「古代文化42巻8号」 1990
澤村仁「鴻臚館の復元」『古代文化42巻8号』 1990
横山浩一「鴻臚館の遺物　鴻臚館の時代②ー鴻都散策ー」『鴻都vol.5』 1990
折尾学「鴻臚館の調査概要」『都府楼10号』 1990
平野邦雄「鴻臚館と木簡」『都府楼10号』 1990
ブルース・バートン　「鴻臚館は国際都市・福岡のシンボルとしてふさわしいのか」『都府楼10号』 1990
澤村仁「鴻臚館の建築　鴻臚館の時代③ー鴻都散策ー」『鴻都vol.6』 1990
平野邦雄「鴻臚館の成立」『古代文化　42巻12号』 1990
折尾学「大宰府鴻臚館（筑紫館）跡の調査概要」『日本考古学協会1990年度大会発表要旨』 1990
折尾学「鴻臚館跡の調査概要」『古代文化　42巻12号』 1990
折尾学　大宰府鴻臚館跡調査考」『児島隆人先生喜寿記念論集　古文化論叢』 1991

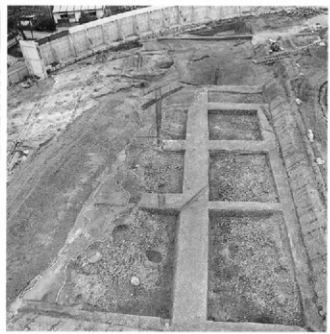
永井路子「やんちゃ貴族と鴻臚館　鴻臚館の時代④－鴻都散策－」『鴻都vol. 7』 1991
亀井明徳「鴻臚館から博多へ」『鴻都vol. 8』 1991
山崎純男「鴻臚館と志賀の海人」『新版［古代の日本］③九州・沖縄　13　鴻臚館再発見』 1991
亀井明徳「鴻臚館貿易」『新版［古代の日本］③九州・沖縄　13　鴻臚館再発見』 1991
高倉洋彰「海の「商人」たち」『九州歴史大学講座10』 1992
池崎譲二「鴻臚館・博多遺跡群・沈没船の調査」『九州歴史大学講座10』 1992
長洋一「新羅商人から唐商人へ」『九州歴史大学講座10』 1992
佐伯弘次「日宋貿易の展開」『九州歴史大学講座10』 1992
山崎純男「特集　鴻臚館」『鴻都vol.12』 1992
山崎純男「筑紫館（鴻臚館）の便所遺構」『月刊文化財350』 1992
山崎純男「鴻臚館跡の発掘調査」『九州歴史大学講座12』 1993
沈仁安「唐朝の鴻臚寺」『九州歴史大学講座12』 1993
佐伯弘次「大宰府鴻臚館点描」『九州歴史大学講座12』 1993
亀井明徳「鴻臚館出土の越州窯青磁の意義」『九州歴史大学講座12』 1993
石井正敏「鴻臚館を彩った外国商人－その活躍の背景－」『九州歴史大学講座12』 1993
坂上康俊「鴻臚館を彩る人々」『九州歴史大学講座12』 1993
田村圓澄「大宰府・鴻臚館・観世音寺」『筑紫万葉の世界』 1994
佐藤鉄太郎「実在した幻の城－大津城考－」『中村学園研究紀要第26号』 1994
佐藤鉄太郎「博多警固所考」『中村学園研究紀要第26号』 1994
佐藤鉄太郎「鴻臚館考」『中村学園研究紀要第26号』 1994
田中克子「北部九州における越州窯系青磁粗製品について－鴻臚館出土遺物を中心として－」
『先史学・考古学論究　熊本大学文学部考古学研究室創設20周年記念論文集』 1994
川添昭二「中世都市博多の形成と展開」『史学雑誌103編12号』 1994
田島公「大宰府鴻臚館の終焉」『日本史研究389号』 1995
瀧本正志「四世紀にわたる古代大陸外交の拠点－福岡県・鴻臚館跡－」
『別冊　歴史読本第20巻5号』 1995
田中壽夫「鴻臚館の調査と整備」『日本歴史575号』 1996
山内晋次「東アジア海域における海商と国家－10～13世紀を中心とする覚書」
『歴史学研究681』 1996
山崎龍雄・古武学「福岡市博物館・陝西歴史博物館友好館提携5周年記念国際学術シンポジウム
『唐朝文化と鴻臚館』実施報告（上）」『福岡市博物館研究紀要第8号』 1998
玉木明史「古代の迎賓館のトイレは何を語るか－福岡市の鴻臚館跡を訪ねて」『歴史九州93』 1998
松原弘宣「陳泰信の書状と唐物交易使の成立」『続日本紀研究第317号』 1998
田中壽夫「考古学から見た史跡整備について」
『日本造園学会平成10年度福岡大会　研究発表資料』 1998
山崎龍雄・古武学「福岡市博物館・陝西歴史博物館友好館提携5周年記念国際学術シンポジウム
『唐朝文化と鴻臚館』実施報告（下）」『福岡市博物館研究紀要第9号』 1999
池崎譲二「福岡・鴻臚館の発掘」『シルクロード学研究叢書2』 2000
池崎譲二「平成11年度鴻臚館跡発掘調査概要」『第3回西海道古代官衙研究会発表資料集』 2000
平野邦雄「大宰府と迎賓館（鴻臚館）」『木簡が語る古代史（下）』 2001
池崎譲二「鴻臚館跡SK01－青磁・白磁」『季刊考古学75』 2001
池崎譲二「平成11・12年度鴻臚館跡発掘調査について」『第4回西海道古代官衙研究会発表資料集』 2000
池崎譲二「古代から中世へ－福岡市・鴻臚館－」『歴史九州　通巻130号』 2001
岡本顕実「古代の交流拠点・福岡－那津官家・鴻臚館」『鴻都vol.50』 2001
青山正明「大宰府鴻臚館」『法曹No.615』 2002

図　　版

(PLATES)



1．平成11年度調査区遠景（西から）



2．SG1046全景（東から）

3．SG1046南斜面瓦出土状況（北西から）

4．SG1046北斜面瓦出土状況（南西から）

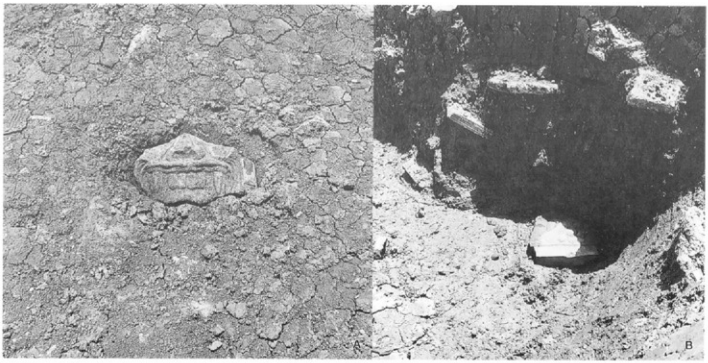
1．ＳＤ１０４５　土層断面東壁（北西から）

2．ＳＤ１０４５　土層断面西壁・南壁（東から）

3．ＳＤ１０４５　土層断面南壁（北から）

4．ＳＤ１０４５　５Ｄ層遺物出土状況（北東から）

1．ＳＤ１０４５　鬼瓦出土状況遠景（東から）



2．ＳＤ１０４５　鬼瓦出土状況近景

1．SG1054　瓦出土状況（西から）

2．SG1054　土層断面（北西から）

1．平成11年度調査区と平成12年度調査区上部検出遺構（南から）

2．平成11年度調査区と平成12年度調査区下部検出遺構（南から）

1．平成11年度調査区と平成12年度調査区上部検出遺構（北から）

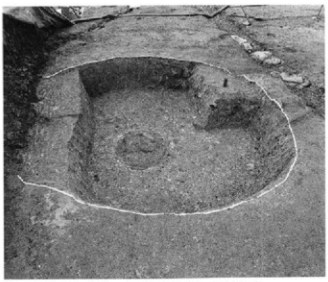
2．平成11年度調査区と平成12年度調査区下部検出遺構（北から）

1．ライトスタンド上部遺構（西から）

2．ライトスタンド下部遺構（南西から）

1．SX1119土層断面（西から）

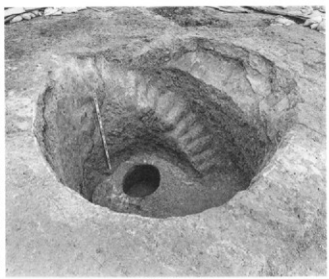
2．SX1119土層断面（東から）



1．ＳＥ１１０２　上面検出状況（西から）

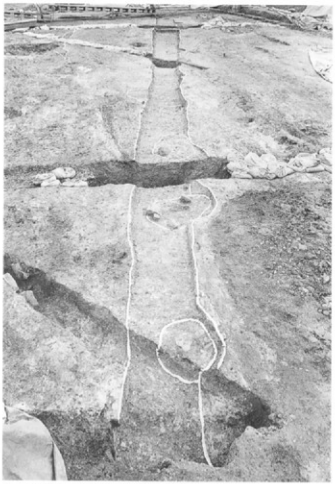
2．ＳＥ１１０２　土層断面（西から）

3．ＳＥ１１０２　下面井筒検出状況（南西から）

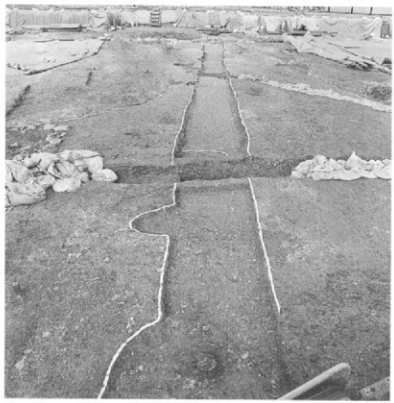


4．ＳＥ１１０２　完掘状況（南西から）

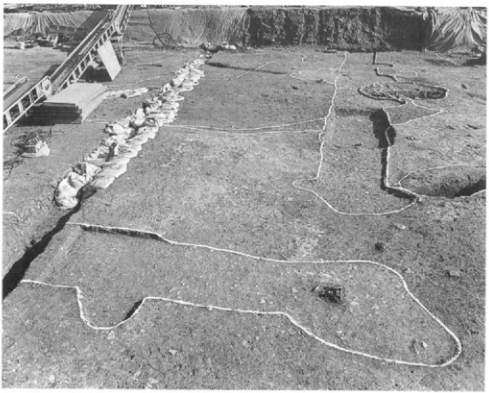
5．ＳＥ１１０２　井筒遺存状況（西から）



1．SA1104　西列検出状況（北から）



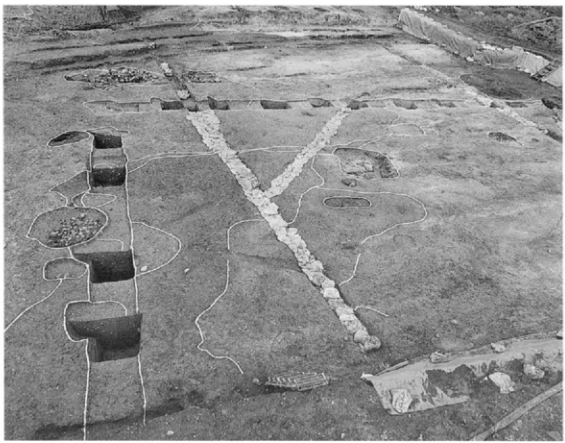
2．SA1104　西列検出状況（南から）



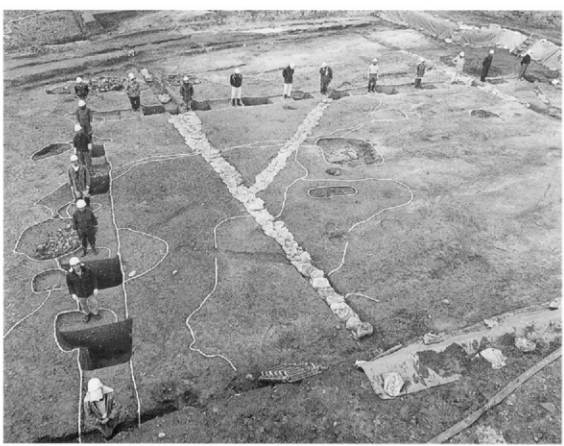
3．SA1104　南列と西南隅部分検出状況（西から）

1．SA1104　柱抜き跡調査後全景（北から）

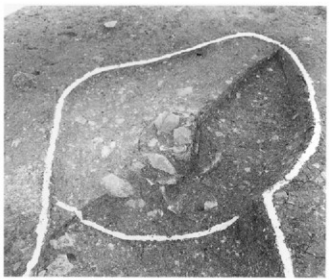
2．SA1104　全景．人の位置が柱位置（北から）



1．SA1104　柱抜き跡調査後全景（東から）



2．SA1104　全景、人の位置が柱位置（東から）

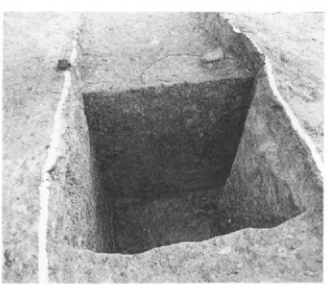


1．P.1（北から）

2．P.2（北から）

3．P.6（北から）

4．P.7（北から）



5．P.8（北から）

6．P.10（北から）

ＳＡ１１０４　西列柱抜き穴断面

1．P.1（東から）

2．P.2（東から）

3．P.4（東から）

4．P.5（東から）

SA1104　南列柱抜き穴断面

1．SG1115（東から）

2．SF1117（西から）

1．SD1116　遺物出土状況（南から）

2．SD1116　遺構確認状況（東から）

3．SD1116　遺構確認状況（南から）

4．SD1116　遺構完掘状況（南から）

1．SD1116　斜面上部出土状況（東から）

2．SD1116　斜面下部出土状況（東から）

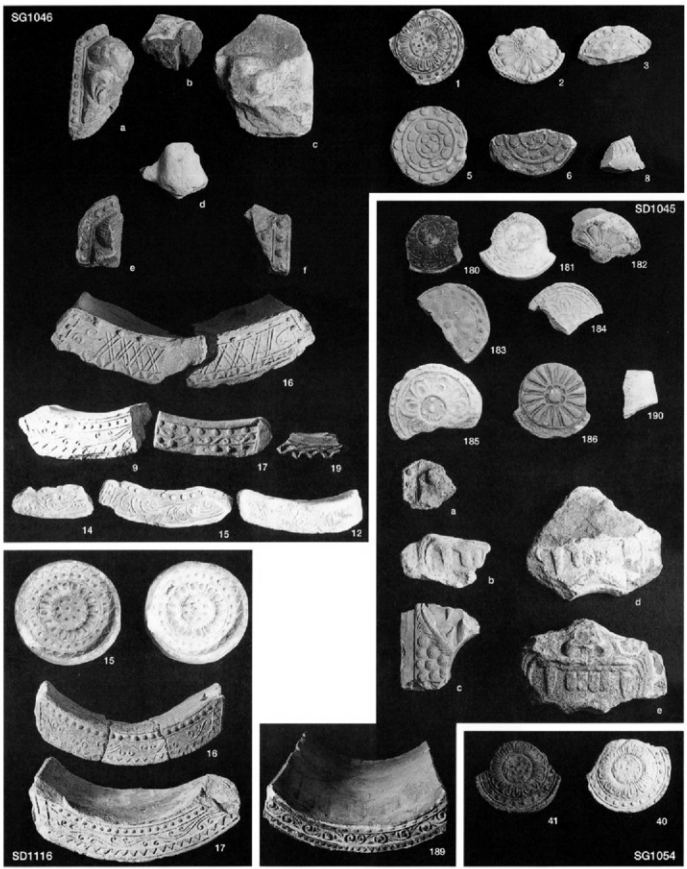
1．SK1103（北から）

2．SK1121（西から）

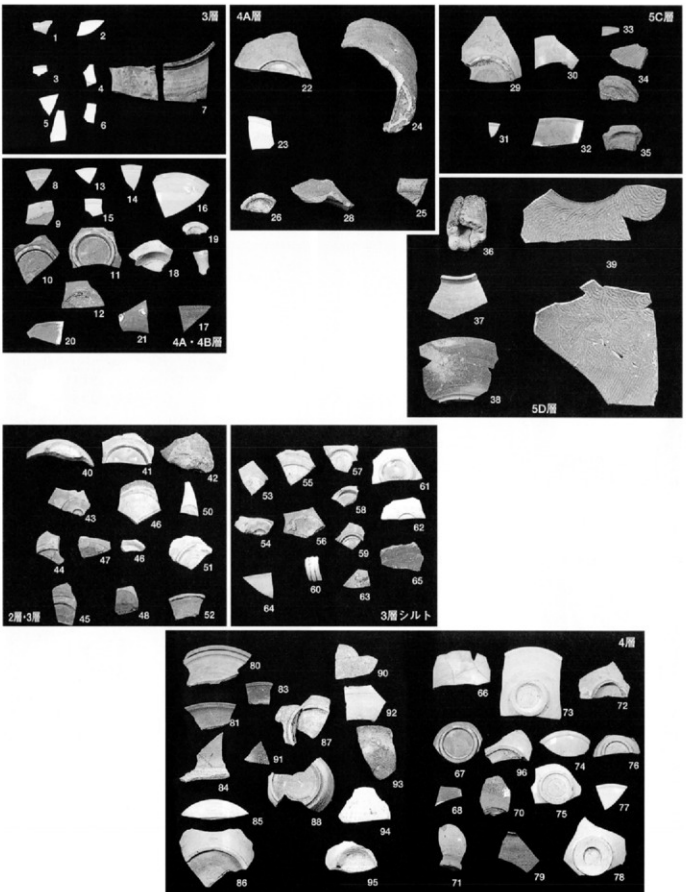
4．SK1124、1125

3．SD1122（南から）

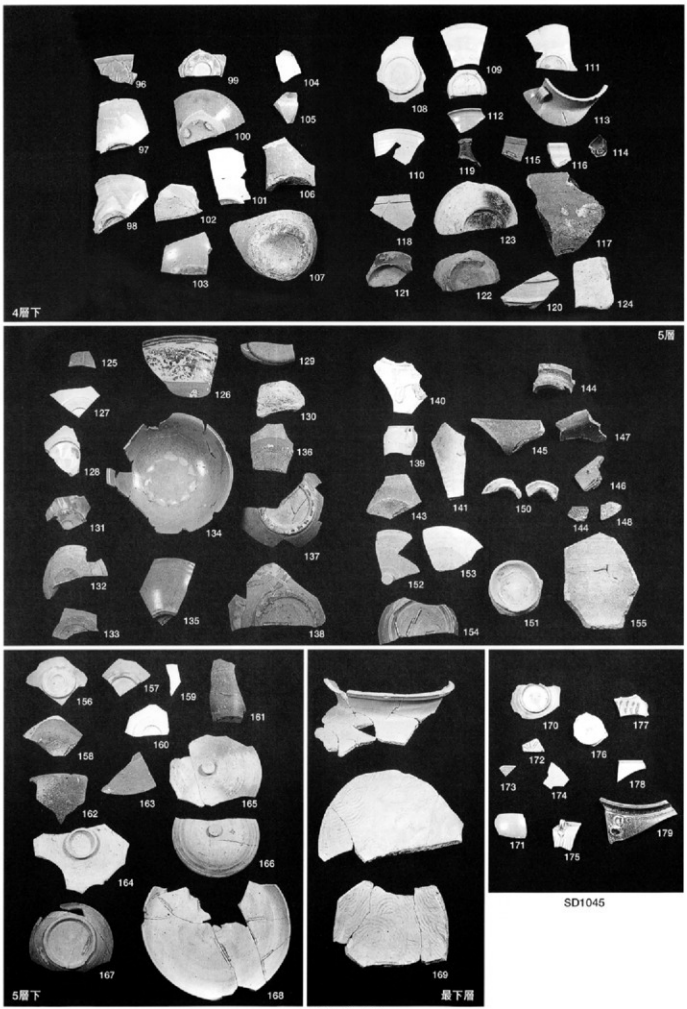
5．SK1124遺物出土状況（東から）


SG1046
a
b
c
d
e
f
16
9
17
19
14
15
12
1
2
3
5
6
8
SD1045
180
181
182
183
184
185
186
190
a
b
c
d
e
SD1116
15
16
17
189
41
40
SG1054

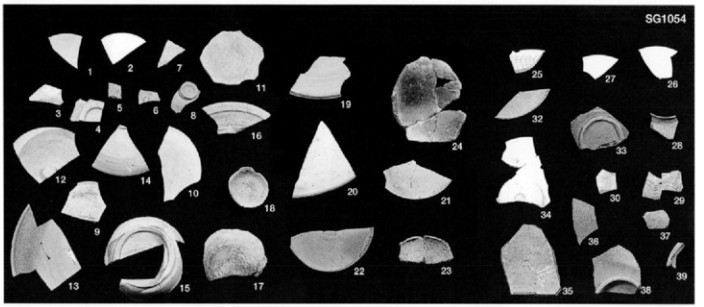
出土遺物（1）

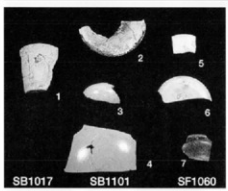


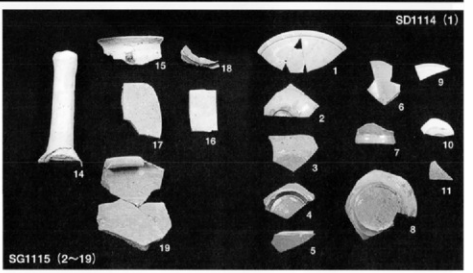
出土遺物（2）

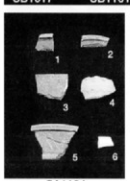


出土遺物（3）


SG1054

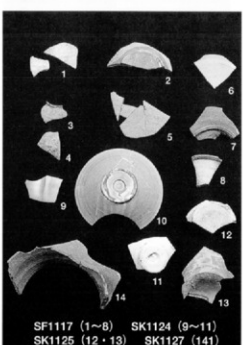

SB1017
SB1101
SF1060


SD1114 (1)
SG1115 (2~19)


SA1104

SK1103

SD1116


SF1117 (1~8)
SK1124 (9~11)
SK1125 (12・13)
SK1127 (141)

出土遺物（4）

鴻臚館跡 12
—平成11・12年度発掘調査報告書—
福岡市埋蔵文化財調査報告書第733集

発行　福岡市教育委員会
福岡市中央区天神一丁目8－1
平成14年3月28日
印刷　寿印刷株式会社
福岡市西区小戸四丁目5－42

KOROKAN
12

Excavation and Studies of
Korokan Ruins
in Fukuoka

March 2002
THE FUKUOKA CITY BOARD OF EDUCATION
JAPAN